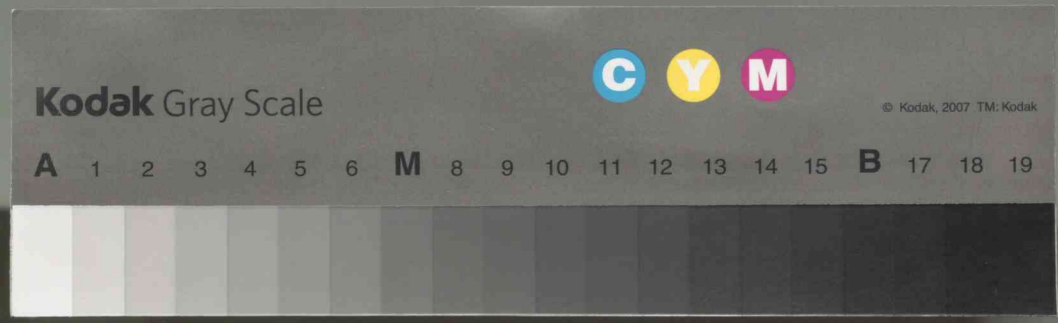


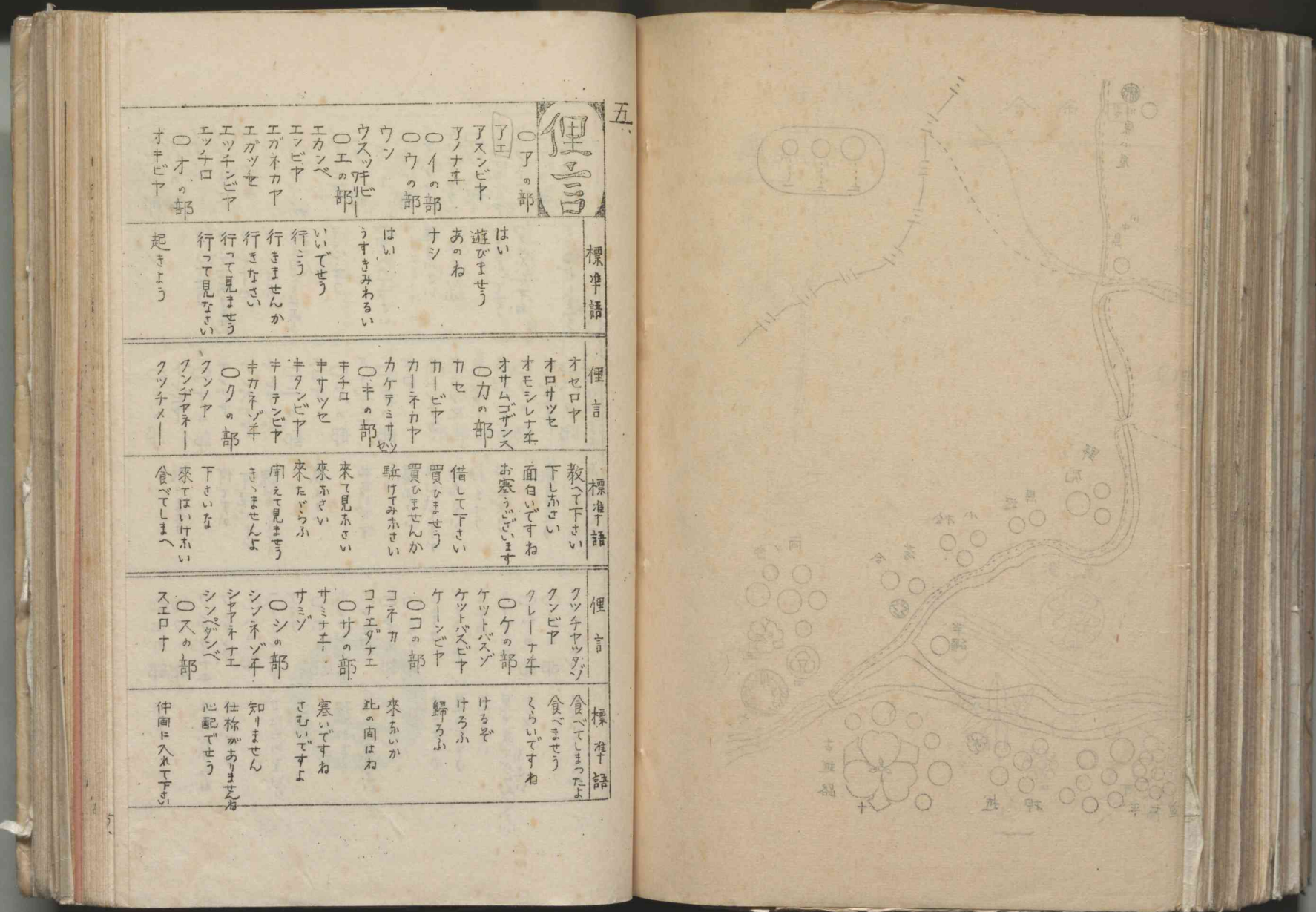
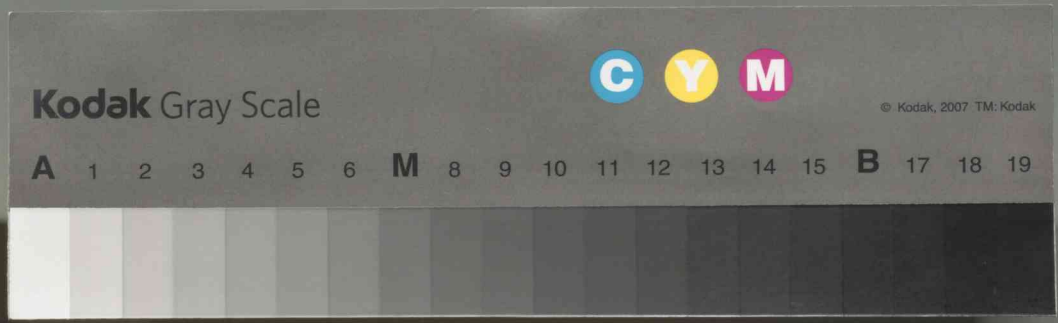
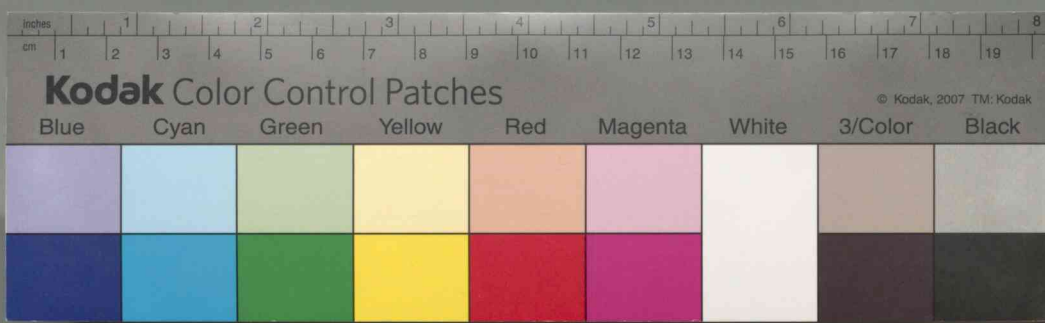
492 西大芦地区 西大芦小学校所蔵資料



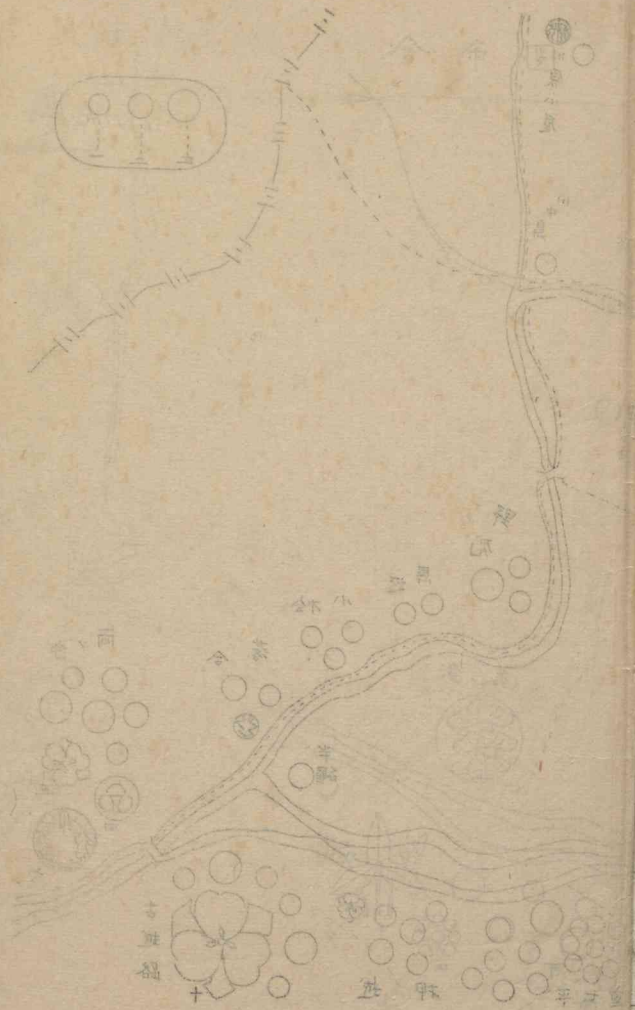


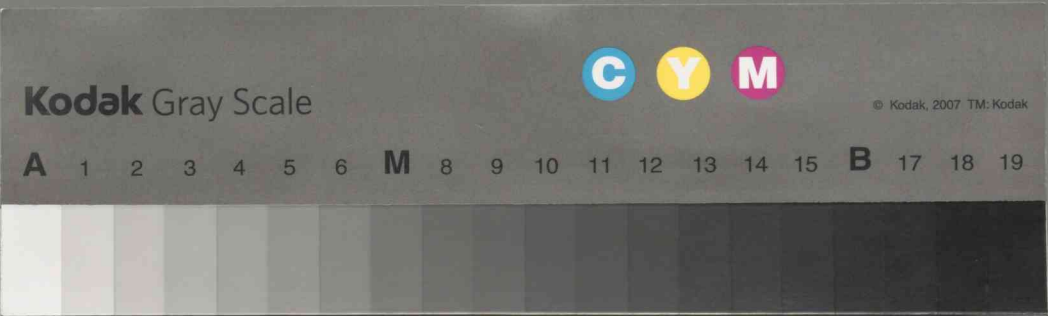
492 西大芦地区 西大芦小学校所蔵資料





<p>五</p> <p>俚言</p> <p>アスンビヤ アノナエ ○イの部 ○ウの部 ウソ ウソツツビ ○エの部 エカンベ エンビヤ エカネカヤ エカツセ エツチンビヤ エツチロ ○オの部 オキビヤ</p>	<p>標準語</p> <p>はい 遊びませう あのね ナシ はい うすきみわらい いでせう 行きませんか 行きなさい 行って見ませう 行って見なさい 起きよう</p>
<p>俚言</p> <p>オセロヤ オロサツセ オモシレナエ オサムゴザンエ ○カの部 カセ カービヤ カーネカヤ カケテミヤ ○キの部 キチロ キサツセ キタンビヤ キーテンビヤ キカネンチ ○クの部 クンダヤ クンダヤ クツチヤ</p>	<p>標準語</p> <p>教へて下さい 下しさい 面白いですね お寒うございます 借して下さい 買ひませう 買ひませんか 駈けてみさい 来て見さい 来さい 来たう 来て見ませう 来ませんよ 下さいな 来てはいけ 食べてしまへ</p>
<p>俚言</p> <p>クツチヤツツ クンビヤ クレーナエ ○ケの部 ケツトバズ ケツトバズビヤ ケーンビヤ ○コ コネカ コナエダエ ○サの部 サミナエ サミン ○シの部 シンネンチ シンネンチ シンペン ○ス スエロヤ</p>	<p>標準語</p> <p>食べてしまったよ 食べませう くらいです けるぞ けるよ けるよ 来さいか 此の間はね 寒いですが さむいですよ 知りません 仕様ありません 心配せう 仲間に入れて下さい</p>





七了イウ枉

朝起は三文の得
朝而は女の腕まくり
ある時正月
一寸の虫にも五分の魂
石橋もたいて渡れ
一に看病ニにくすり
急がばまわれ
命あつてのものだ相
魚心あれば水心あり
氏より育ち
噂をすればばかげがさす
嘘も方便
たんの下の力持
女の一寸岩でもとほす
帯に短したすきに長し
思ひ立ったが吉日

狸
ロコロ

カ

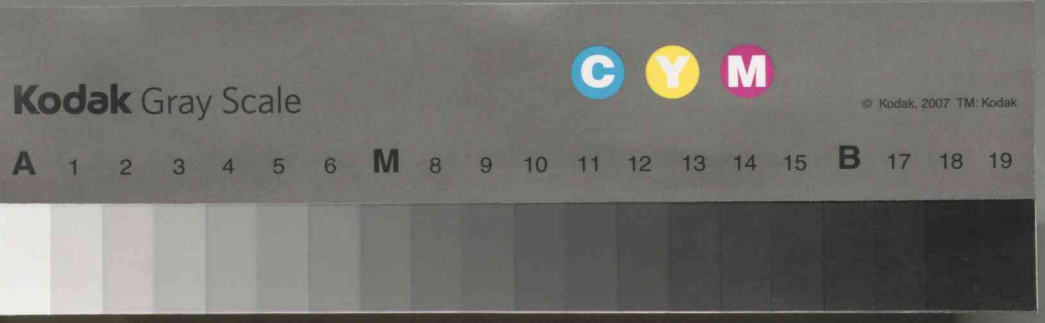
飼犬に手をかまれる
蛙の面に水
可愛い子には旅させよ
鎌の川流
龜の甲より年の功
悲しい時の神頼み
郷に入つては郷にしがへ



六 童話

地方的ニ流行スルトイフ程ノ童話ハナイガ本村ノ特色ヲ表ハシタモノ
デ比較的ニ知ラレテモノチアレバ
或る人が裾を端折つて川を渡りまじつた
岸について見ると非常に裾の中が重いわで、見ると大ききサモが次山
はね込んで居ました。びつくりして早くをかへ上ろふと岸の木根
につかまりました。然し木の根と思つたのは野兔の後脚でした。
不意に後脚をつかまれた兔もびつくりして逃げ、根もかえつて土を掘
りました。
ところが丁度そこに山芋があつて、兔は山芋を掘りだしてしまひまし
た。其れで其の人は一度にヤモと兔と山芋を取ることが出来ました。
一人のお百姓が山芋掘りをしておました。
其れへ古翠道者が通り掛り、「さうは何ておこるだ」と訪ねました。
すると其の百姓は「こらとこら、ちやぬ丸山寺だ」と答へましたので、
道者が「おんが(市地)の車だ」と言ひますと、百姓は変な顔をして「おんが
(寂)は東京へ行つた」と答へました。
其れを聞えた道者は怒つて「さまくらおい(曲る)と言つたので、百姓は
「おんが(今)は明日くるか、わかんね」と言ひましたとぞ。まほり





ホヘフ ヒ ハノネヌニ

七度搜して人を疑へ
 七度くらべて一度裁て
 二度あることは三度ある
 ホシ
 ホシ
 花よりだんご
 馬鹿と鉄は使ひよで巧れる
 人を見たらどるばうと思へ
 火を見たら火事と思へ
 人の噂も七十五日
 人は言ふなり風は吹くホリ
 人の口には戸は立てられ始
 人を呪はつ穴ニツ
 人の禪で角力をとる
 貧乏ひまなし
 百兩のかたに網笠一かい
 夫婦喧嘩は犬も食はぬ
 ホシ
 骨折指の草臥まうけ

ソワロレルリヲ ヨエヲモ メムシマ

坊主に人サリやせまでにくい
 坊主だませば七代たつる
 見よう見まね
 ホシ
 めくら蛇の標だ
 雄雞遊めて雄雞時つく
 ものぐさ者の節句働き
 安物買の銭失ひ
 雪の翌日は裸虫の洗濯
 寄らずせぬらす
 横にまんが
 來年の事言へば鬼が笑ふ
 流は萬流
 ホシ
 ホシ
 ホシ
 以上

ス シ サ コケ ク キ

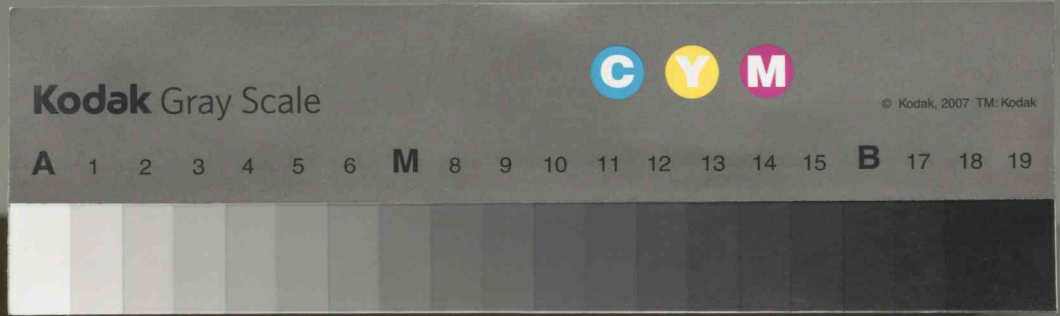
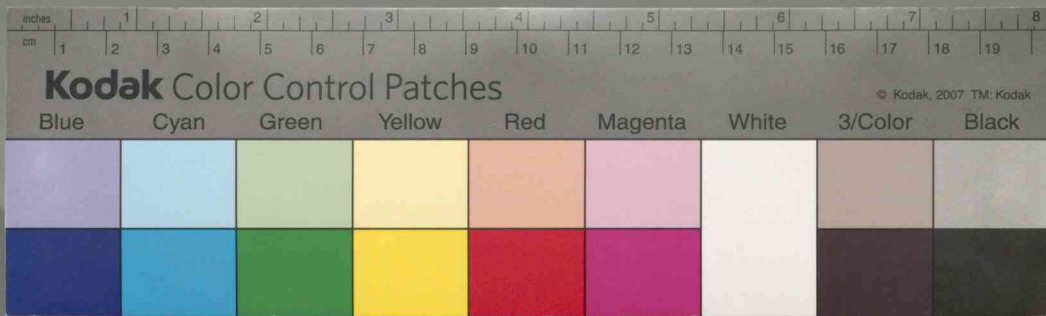
兄弟は他人の始り
 南くは一時の恥辱かぬは末代の恥
 くすり九層倍
 齋つても鯛
 臭いものには小た
 ホシ
 ころばぬ先の杖
 弘法にも筆のあやまり
 子供のけんくわに親が出る
 乞食が馬買つたやう
 三年立てば役に立つ
 三人寄れば文珠の智慧
 さわらぬ神にたよりなし
 去る者日々に疎し
 死人に口ホシ
 親の泣寄り他人の食寄り
 朱に交れば赤くなる
 師走女は鬼も恐れぬ
 じやの道は蛇

ナトテ ツチ タソセ

ホシ
 損して得とれ
 立板に水
 短気は損気
 立つ鳥跡をにごさず
 地獄の沙汰も金次第
 つりがねと提灯
 八で拾つてみてこぼす
 出ない乳はのませられぬ
 遠き親より近くの他人
 所変れば品かはる

泣
 面
 蜂





八、娛樂並趣味

●娛樂種類

獅子舞 屋台囃 盆踊

起源 獅子舞 屋台囃 盆踊

明治十年頃草久塩沢坪上沢藤平氏が今市町ノ鳥龜トイフ師ニツイテ
習得シ以テ來熟心ニ人々ニ教ヘタノデ塩沢下岡ノ畑八間ノ者が盛
ニ習ヒ現在モ尚ホ衰ヘズニキル

之ハ日光囃トイヒ日光ノ祭典ニ用フルモノデアツテ笛(五本調子)太鼓
鉦鼓ニ味ト之ニ舞ノ耐クモノ静カナ囃デアル

調子ユルアカデアツテ聴ク人ヲシテ自ら悠長ナル気分ニ誘フ

昭和五年六月頃AKヨリ放送シ又ピクチャー 蓄音機会社ニ招カレテ
レコードニ吹込シタ

獅子舞
草久鹿ノ入坪ニアツテ起源ハ明カテナイガ文化ニ年頃ガラウト言ハ
レテキル

其ノ當時ハ何流デアツタカ不明デアルガ毎年旧盆十七日ニ八年中行
事トシテ必ズ舞ヲノデアル

其ノ後明治十四年九月朔ノ河内郡南白村ヨリ同村高座山神社獅子
舞ヲ招キ傳授ヲ受ケ改メテ南白流トシタ

以後段々衰ヘタノデ石原歌吉佐藤豊三郎神奈滿清四郎福日甲次郎
ノ四人が復活セントシ坪共同山林ヲ伐採シテ其ノ費用ニセンノ衆
議ニ諮リ一致ノ上習得シ坪内一同ニ傳授シタ

其ノ後年フルニシタガハ舞型ハ正シクナイガ現在モ概シテ神社祭典及
八朔ニ百十回ナドニ奉納スル

素科舞調ナ舞ナレバ舞人モ見ル人モ自ラ精神ヲ活化セフレル

屋台囃
何年頃カ不明ガ本村ニ興テ新調シタ為祭ヲ賑ヤカニスルニ其ノ
必要ヲ感ジ屋台囃ヲ始メタトイフ

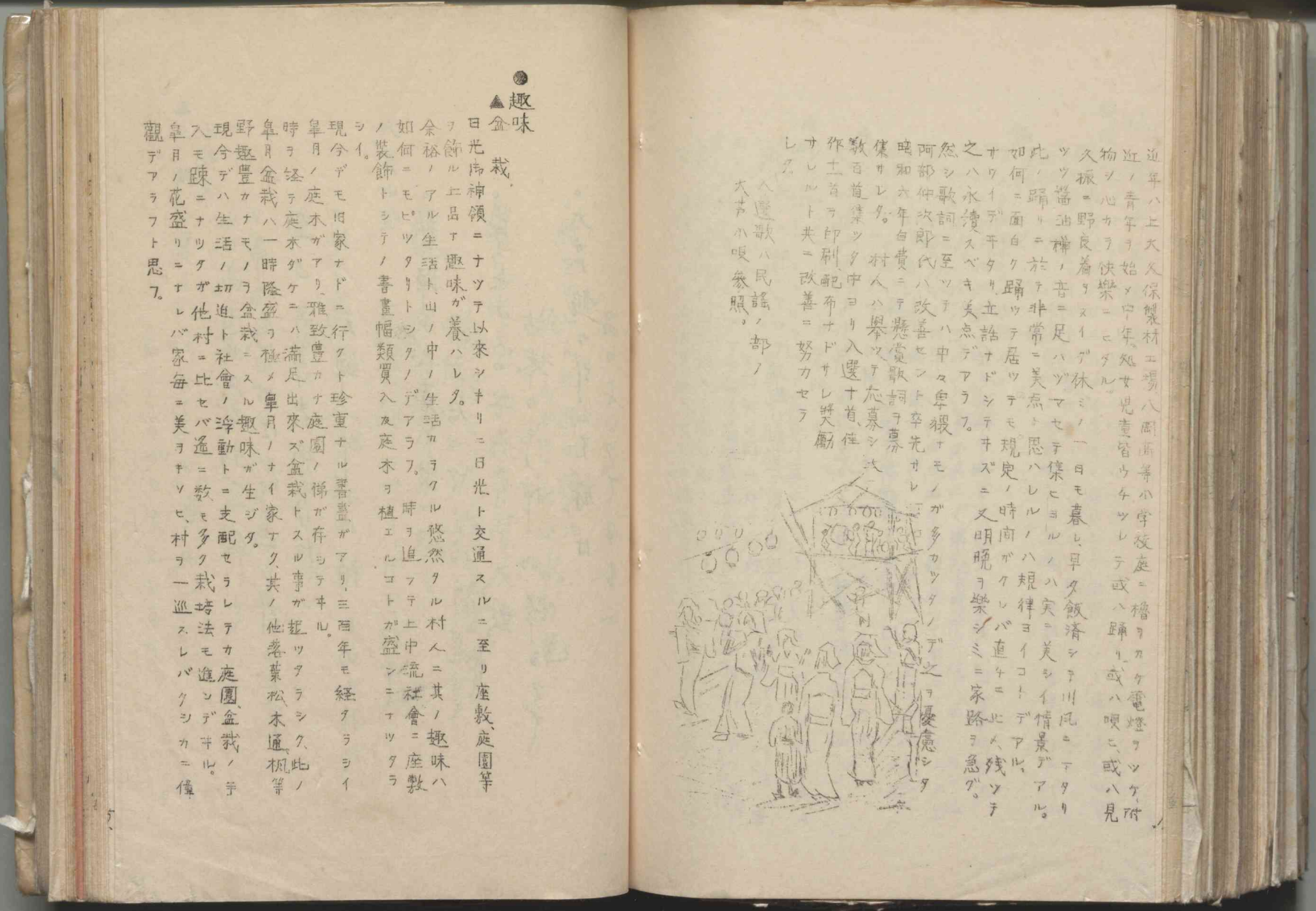
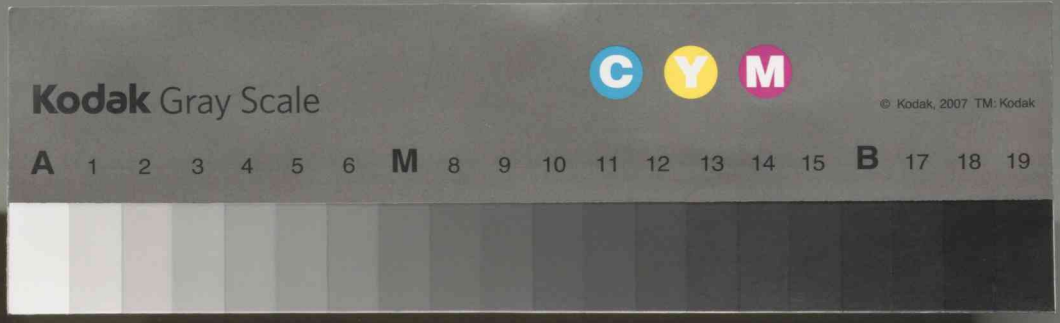
囃ハ五反囃(江戸シヨイデ)神田丸田丁目録(倉)デア現在モ上下八久保
下岡塩沢中ノ畑八間ニアサ祭典唯一ノ奉納舞臺舞デアル

神奈祭典上久保下岡塩沢中ノ畑ノ八坂祭典下久保金比羅祭典
草久金剛祭典ニ奉納スル

盆踊
盆踊ガ初ツタハ明治四十年頃デアツテ其ノ當時ハ青年ノミニテ必
ズニ集リ樽ナドカケテ醬油樽カコシテ舞ヲシタモノデアリ

其レガ年終ルニシタガハ高座且ツ趣味多ク娛樂トシテ最モ適切デア
ルコトヲ認メテ大規模ニ行ハレル様ニナツタ



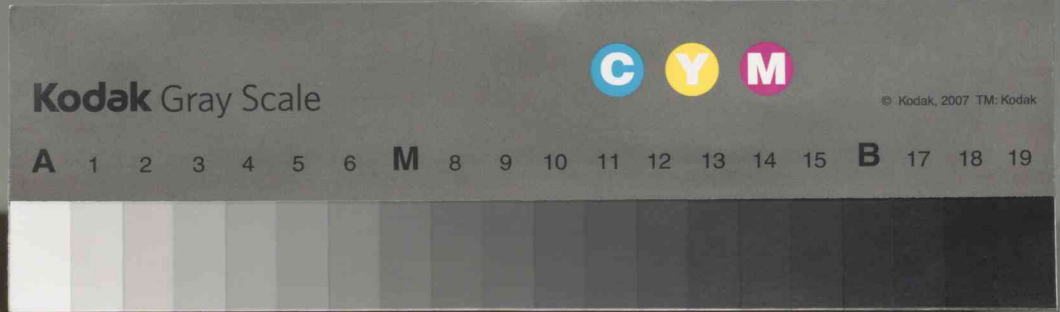
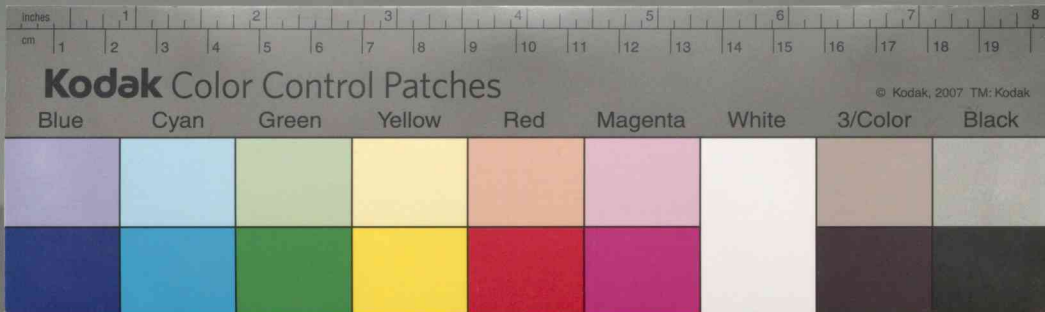


● 趣味
▲ 盆栽

日光神領ニナツテ以來シナリニ日光ト交通スルニ至リ座敷庭園等
ヲ飾ル上品ト趣味ガ養ハレタ
余裕ナル生活ト山ノ中ノ生活カヲクル悠然タル村人ニ其ノ趣味ハ
如何ニモヒツタリトシタノデアラフ時ヲ追フテ上中流社會ニ座敷
ノ裝飾トシテノ書畫幅類買入及庭木ヲ植エルコトガ盛ニナツタラ
シイ
現今ゾモ旧家ナドニ行クト珍重ナル書畫ガアリ三百年モ経テラシイ
年月ノ庭木ガアリ雅致豊カナ庭園ノ樹ガ存シテキル
時ヲ経テ庭木ガケニハ満足出來ズ盆栽トスル事ガ起ツタラシク此ノ
年月盆栽ハ一時隆盛ヲ極メ年月ノナイ家ナク其ノ他落葉松木通楓等
野趣豊カナモノヲ盆栽ニスル趣味ガ生ジダ
現今デハ生活ノ切迫ト社會ノ浮動トニ支配セラレテカ庭園盆栽ノ于
入モ疎ニナリツグガ他村ニ比セバ遙ニ教モ多ク栽培法モ進ンデキル
年月ノ花盛りニナレバ家毎ニ美ヨキソビ村ヲ一巡スレバクシカニ偉
觀デアラフト思フ

近年ハ上大久保製材工場八幡等小学校庭ニ櫓ヲカケ電燈ヲツケ附
近ノ青年ヲ始メ中年婦女兒童皆ウチツレテ或ハ踊リ或ハ喫ヒ或ハ見
物ノ心カラ快樂ニモダシ
久振ニ野良肴ヲヌイテ休ミノ一日モ暮ヒ早夕飯清シテ川風ニ下タリ
ツツ湯油禰ノ音ニ足ハツマセテ集ヒヨルハ実ニ美シイ情景デアリ
此ノ踊リニ於テ非常ニ美点ト思ハレルハ規律ヨイコトデアリ
如何ニ面白ク踊ツテ居ツテモ規定ノ時間ガクレバ直ニ此ノ残ソテ
オワイテ干タリ立話ナドシテオニスニ又明晩ヲ樂シニ家路ヲ急ガ
之ハ永續スベキ美点デアラフ
然シ歌詞ニ至ツテハ中々卑猥ナモノガ多クツタノデ之ヲ憂慮シタ
阿部仲次郎代ハ改善セント卒先サレ
昭和六年白費ニテ懸賞歌詞ヲ募
集サレタ村人ハ譽ヲテ羨慕シ
歌百首集ツタ中ヨリ入選十首佳
作土音ヲ印刷配布ナドサレ獎勵
ナレルト共ニ改善ニ努カセラ
レタ
へ選歌ハ民謡ノ部ノ
大芦小唄参照





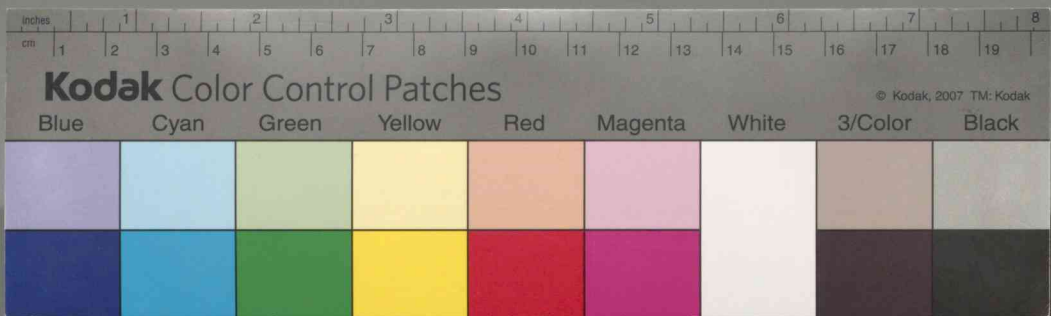
▲民話
木橋囃

山口高山木は大木で
元はめはんいらと引のたす
盛り五年もあやに
元締一姉に補とめられた。

大芦小唄
歌へ踊子大芦小唄
音頭合せてしなよく見よく
鳴らせ小唄の音たけよ太鼓
古峯の湯神に帰るやうで
大芦娘の引おす麻は
呂のよいので日本一

。村をわらんだ杉山檜山の
絵にもかきたい水の色
。山の中でも大芦村は
義理と人情の花が咲く
。鉄を桐木のこりの腕も
和樂舞にやいなを出す
。山も高いが大芦村は
麻は屋の名も高い
。年が経いてもお花は
昔忘れぬ盆踊り
。居もい信もよい大芦村で
まじしらかの生えるまで

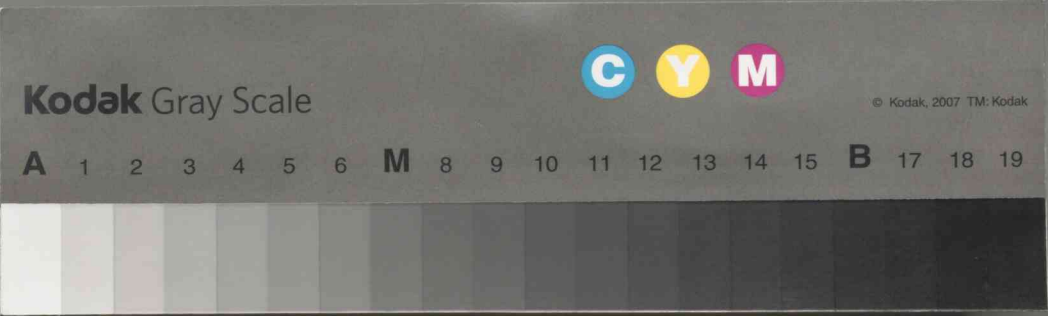
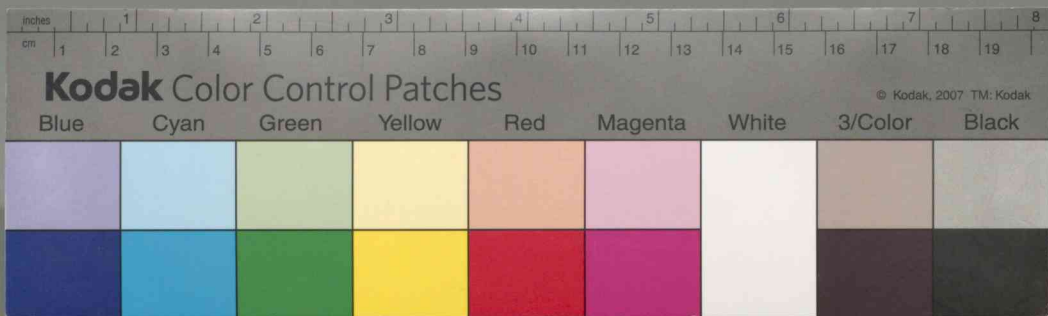




思ふ心の一つも云へぬ
 大芦娘のしほらしや
 佳作
 山にひりけよ 大芦音頭
 山ぢや 鬼が 踊り出す
 骨を借しむな 力の限り
 金は 働く手は 上る
 汗と 誠で 咲きたる花は
 末ぢや 黄金の 安を 結ぶ
 浮世苦勞を 大芦川に
 清く流して 地を 踊り北
 村の娘と大芦川は
 底の底まで 澄んでおる
 わたしや大芦山の 花ぢ
 たれに あげませう 此の花を
 村のしまんは 蚕と 麻と
 馬車で 積み出す 野州村

▲ラヂオ、蓄音機
 ラヂオ 二 (阿部 医院、古峯ヶ原、石原氏)
 蓄音機 二十二台
 戸数多イノニ比較シテ、ラヂオ、蓄音機ハ極少數シカナイ。
 之ハ鹿沼ニ遠ク且ツ不便ナル点ニヨリ買入及ビ手入ニ不自由デアラル
 コト、又コラシタモノニ接シテ方ガ少イ爲ニ趣味ガ生ゼヌ爲デアラフ
 ト思フ。





(一) 迷信

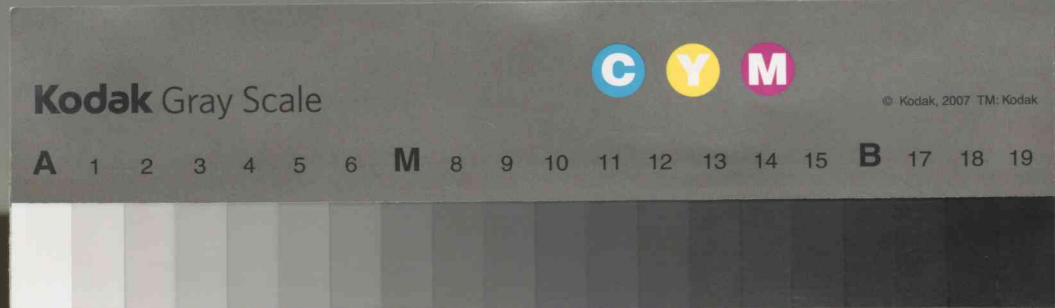
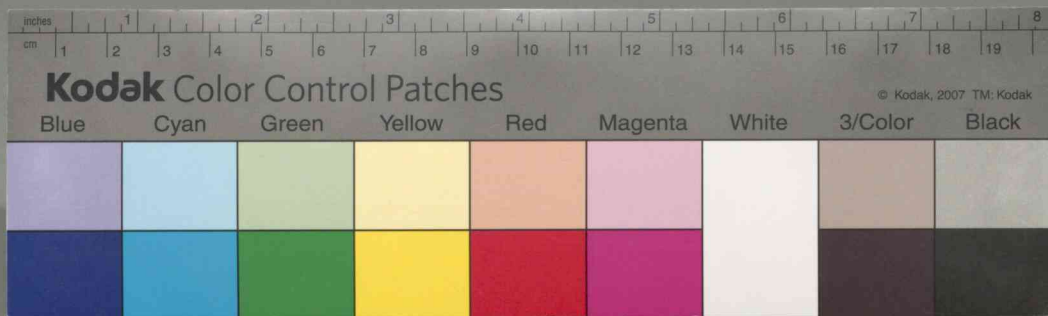
一本村ノ迷信ハ相宜ニ深イト見ラレ。次ノ様ナ例モアル。兼ニ云ハレタ。史ヲモストコロヲ軋カシタ。柱釘ノ打テモラツタ。神ノ御ガ種ク。悪イ方角ノ向イテサハ早速除コシテゴフ。ト。衆ノ帰ツテ赦ヘラレタ。通リニ快方ニ向クカラ心配ガナト。衆ノ帰ツテ赦ヘラレタ。通リニ。シテ釘モ全部引抜イテシマツタ。シカレ痛人ハ一向ヨクナク重クナ。ルバカリ。又別ノ所ニテ費フト佛ノタハリト。神ノ願ハズシヨシテサハ早速除コシテゴフ。ト。衆ノ帰ツテ赦ヘラレタ。通リニ。イカニ向ツテ違者ニナレト。其ノ晩ハ幾分ヨクイ様ナレト。夕方。様ガ如イタノダ段々ヨクナレト。其ノ晩ハ幾分ヨクイ様ナレト。夕方。カラ急費シテ匠者マ家ノ者ヲ看養申當ノ甲斐モナク止クナレト。シ。マツタ。

(二) 九信仰

村民一般ニ信仰心ハ深イ。然シテ現五ノ信仰状態ハ混沌トシテ。テ帰趨ヲ知ラザル状態テアル。詳細ハ第四章ノ参照

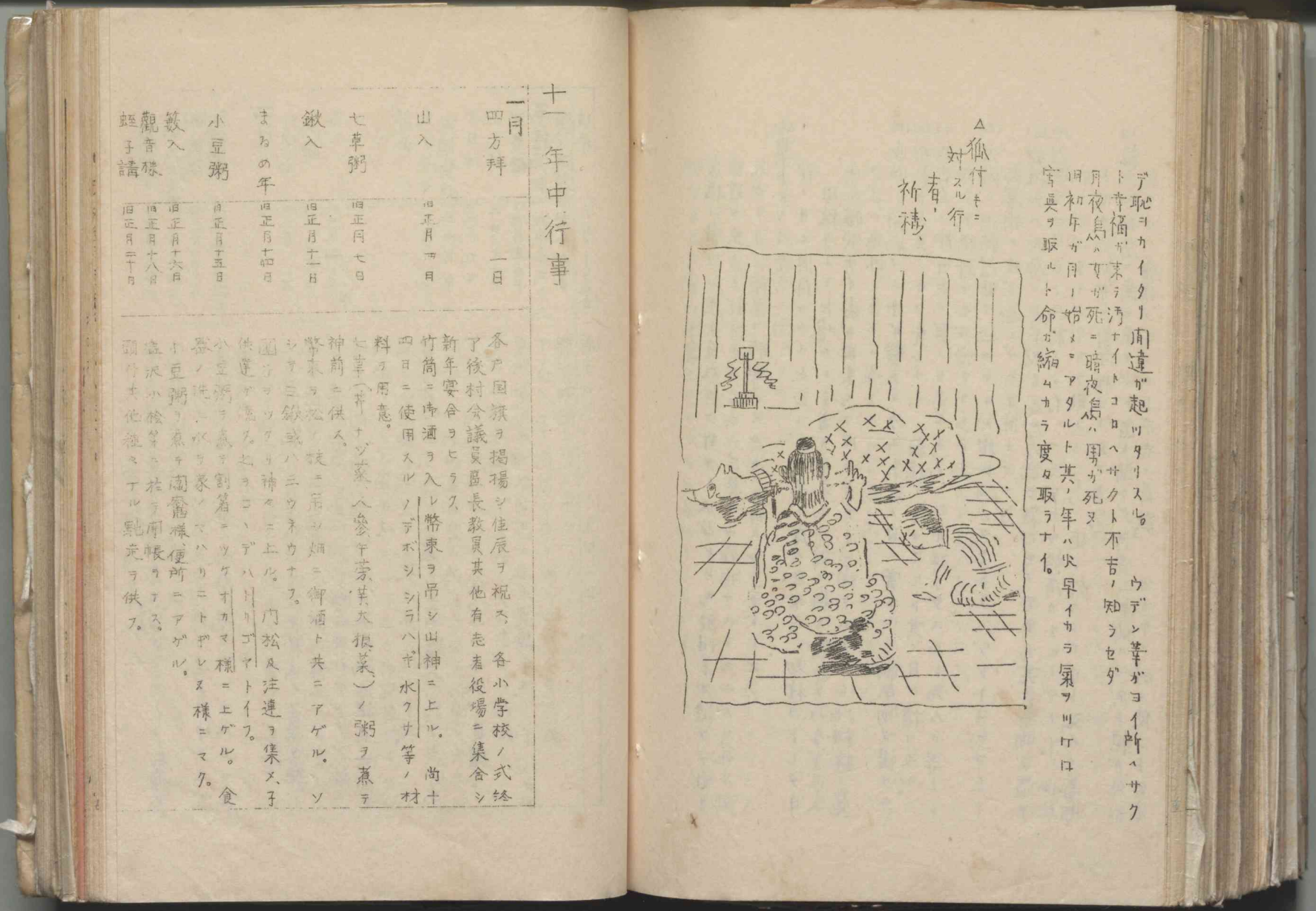
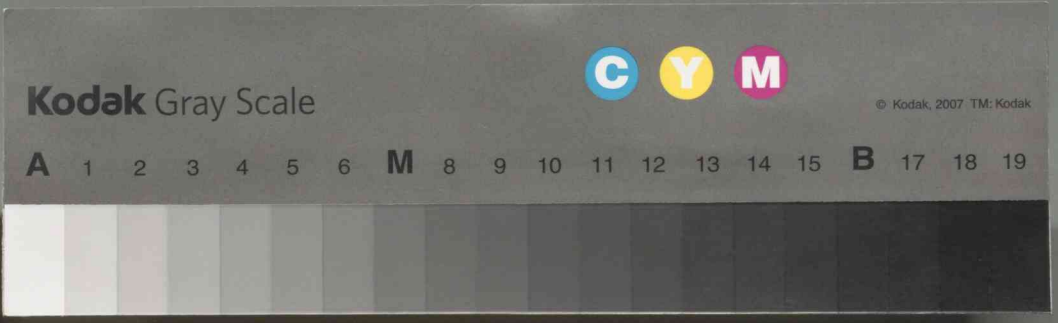
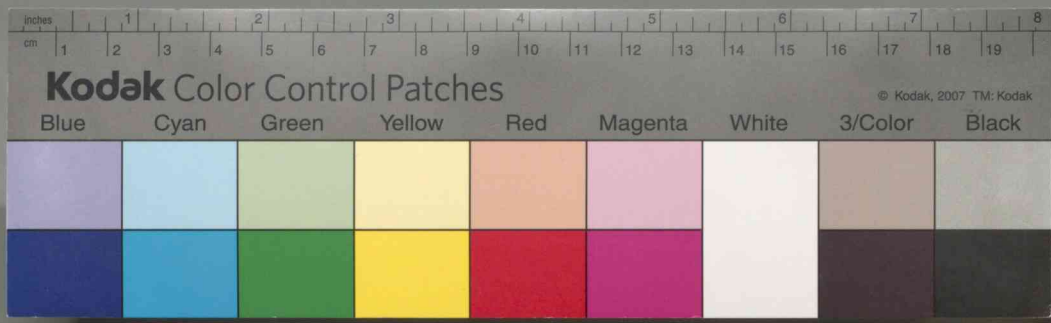
○ノ様ヲ見テ費フト狐付キダトイフ。狐付テハ匠者ノ藥ハイナクイ。行者ガ頼マレテ末テ色。者ヲ頼ンデ狐ヲ放シテ費ヒトイフ。ノ。後ハキツトヨクシテ見セルトイ。フ。祈禱ノ物ヲ鉄砲デオドカス。減食。煙。追。其ノ他。レカシ仲々狐ハ放レナカレタ。幾日カタツテ病人ガオトナレクナツ。別皆狐ガ放レタトイフ。テ大喜ラレタ。ソシテ匠者ニテ費フトモウ。





衰弱シキツテ二度ト立テマイトイフ。匠者、道理マル語ヲキイテ始
 メテ看後ヤテ當、過ツテモタコトヲ知ツタガモウ英、時ハトリカ
 イシガツカナイノデアツタ。
 祝事ニツイテ
 祝儀不祝儀ニ寛、目ヨ思ハ、(千里行ツテ千里帰ル、意)
 祝儀其ノ他吉事ニハ佛滅ヲ忌ム。
 祝儀、贈物、鉢ハ洗ハズ、何カ鉢ガヘレヨ必ズ入レテヤル洗ツタリ
 鉢ガヘレヨシナカワツタリ下縁花ガ悪イナシラボテ。
 祝儀、雨ヤ雪ガ降ルト降、込、ラレルトオツテ花ゾ。
 四、姉、姉、産ニツイテ
 卵、カラヨマムト難産スル。姉帰ガ火事ヲ見ルト赤イ瀾、子供ガ出
 來ル。姉帰ガ葬式、場ニ出ルト悪イ瀾、子供ガ出來ル。
 姉帰ガ懐中ニ鏡ヲ持ツテサルト色々、難ガ陳ラレル。姉帰ガ息
 ノ肉ヲ食フト三口ロ、子供ガ出來ル。姉帰ノ夫ガ床滲スルト死人ガ
 死ニキレナイ、ト、エフ。
 五、葬式其ノ他佛事ニ関シタモ、
 葬式ニ友引ト寅、日ヲ不、友引ハ友ヲ引キ寅、月ニハ、カヘツテク
 ルト云、葬式、枕ガゴヨ人ニ見ラレナイヤウニ取ツテ食フト頭
 供ガ丈夫ニ育ツオ基テコロブト三年生キヨレナイ。
 六、遺言ニツイテ
 床振、華ヲハイテ魚取リ一行ト山トレル。経性子ヲ縫ツタ針ヲ
 娘達ガ使フト針ノ手ガ上ル。片足ツツ履物ヲハオセルノハ死ンダ
 人ガカリ、棺ヲ腹帯ニスルト安葬スル。ナド、エフ。
 七、麻、
 申ノ日ニ麻袴コスルトシツボ、本イ麻ガ出來ル。物種ヲ下シタ日
 田植ヨスルト喰ハナイ者ガ出來ル。種ヲ蔭キ殘シタウ本ガ出來
 ルト喰ハナイ者ガ出來ル。旧十月十日ニ畑ニハ入ルト地神林、鬼
 ヲオツカリ、ナド、エフ。
 八、商人、
 商人、朝初メニオガ寛ヒコケルト其ノ日ハ賣レル。朝吊物ヲ借リラ
 レルト其ノ日ハ賣レル。朝儀、語ヨスルト其ノ日ハ損ヲスル。
 九、旅行、
 旅行、旅行ニハ寛ノ日ヲエラフ。七日帰リヨスルト死人ト手シト
 六ツテ絶封ニ七日帰リヨシナイ。
 十、洗濯、
 洗濯、洗濯物ヲ込マトキハ始メ通シタ方カラハツシテコムコト、
 洗濯物ハ洗ズ、盥シデカラ用コト。
 十一、裁縫、
 裁縫、縫物ハ不、成、月ニハ着物ヲ裁クモノ、テナイ、其ノ着物ヲ着テ
 物事ニ当ルト成、裁、シ、一、反、テ、三、ツ、袷、肩、カ、ク、モ、ノ、テ、ナイ、仕、立
 物、ハ、ズ、タ、ン、テ、カラ、用、コ、ト、返、シ、針、ヲ、シ、ナイ、ト、死、人、ノ、着、物
 ト、同、ジ、初、年、ニ、針、ヲ、使、フ、ト、火、ニ、立、ツ。
 十二、歯、
 歯、ハ、自、馬、ニ、齒、ヲ、見、セ、ルト、齒、ガ、弱、ク、ナ、ル。
 歯、カ、ケ、ニ、履、物、ヲ、却、レ、ルト、不、吉、前、徴。
 歯、ガ、ケ、ニ、針、ヲ、使、フ、ト、死、マ、ス。
 十三、杖、
 杖、ハ、杖、ヲ、ク、ト、親、ガ、死、マ、ス。
 杖、ガ、ケ、ニ、針、ヲ、使、フ、ト、出、産、



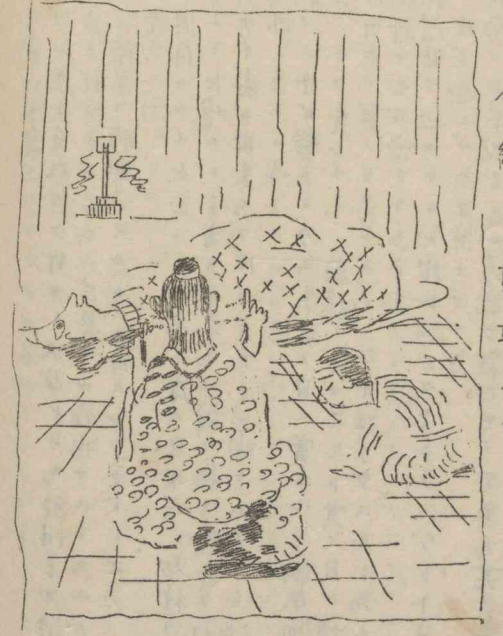


十一年中行事

四月	四方拜	一日
山入	旧正月四日	
七草粥	旧正月七日	
歛入	旧正月十一日	
まるの年	旧正月十四日	
小豆粥	旧正月十五日	
歛入	旧正月十六日	
観音様	旧正月十八日	
蛭子講	旧正月二十日	

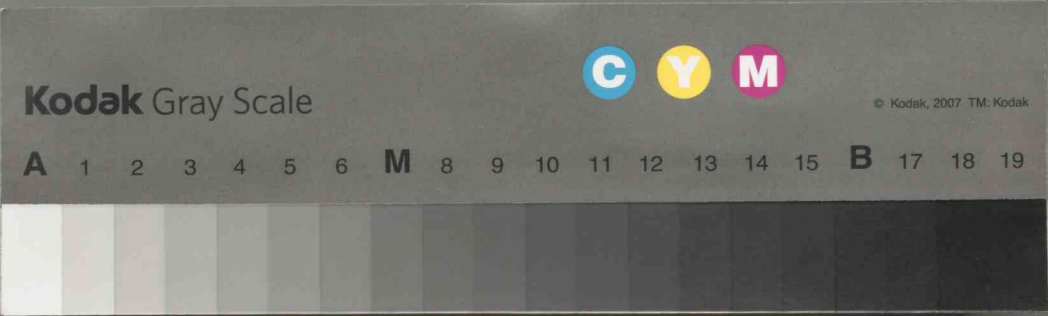
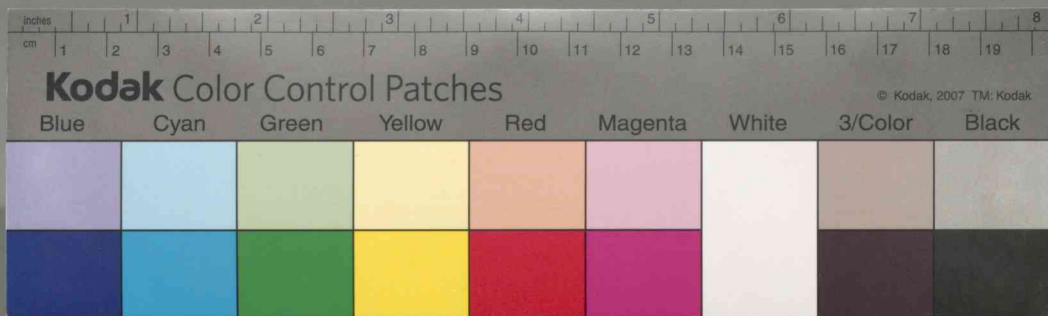
各戸回旗ヲ掲揚シ佳辰ヲ祝ス 各小學校ノ式終了後村會議員區長教員其他有志者役場ニ集合シ新年宴會ヲヒラケ
竹筒ニ清酒ヲ入レ幣束ヲ吊シ山神ニ上ル 尚十日ニ使用スルノデボシシラハギ水クサ等ノ材料ヲ用意
七草(芹、ナズ菜、ハルコ、オシロイ、ハクサイ、オシロイ、ハクサイ)ノ粥ヲ煮テ
神前ニ供ス
幣束ヲ込メテニ居テ御酒ト共ニアゲル
シラニ歛或ハ三ツネウナス
園子ヲウツリテ神々ニ上ル 内松及注連ヲ集メテ
供進ガ盛ルセヨコ、デハリ、ゴヤトイフ
小豆粥ヲ煮テ割箸ニツケオカマ様ニ上ケル 食器ノ洗ハカリ家ノハハリニトブレヌ様ニマケ
小豆粥ヲ煮テ割箸ニツケオカマ様ニ上ケル
盆洗ハカリ家ノハハリニトブレヌ様ニマケ
頭付其他種々ナル馳走ヲ供ス

△狐行キ
対スル行
有、
祈禱



デ恥ヨカイタリ周達ガ起リタリスレ
ト幸福ガ末ヲ汚シイトコロハサクト不吉ヲ知ラセダ
月夜鳥ハマカ死ニ暗夜鳥ハ周ガ死
旧初年ガ月一始メニアタルト其ノ年ハ火早イカラ氣ヲ可ク
官長ヲ取ルト命ガ縮ムカラ度々取ラナク





Handwritten Japanese text on two pages of a book, likely a calendar or festival record. The text is organized into columns and rows, with some entries including dates and descriptions of events or rituals.

Left Page:

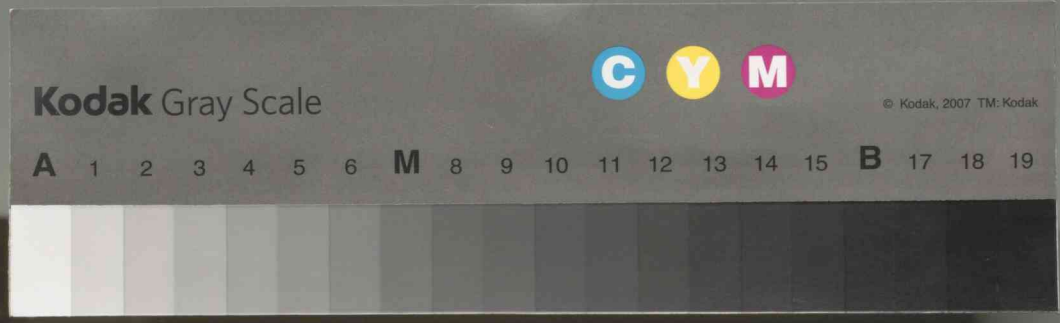
- 春季皇靈祭 彼岸(中日) 彼岸(中日) 旧三月中
- 雷電祭 旧三月中
- 金剛祭礼 旧三月中
- 代参 旧三月中
- 蚕影山 旧三月廿四日
- 四月 神武天皇祭 四月三日
- 釋迦祭 旧四月八日

Right Page:

- 天神様 旧正月二十五日
- 山神講 旧正月二十五日
- 不動様 旧正月二十八日
- 二月 神明祭 旧二月一日
- 初年 旧二月初十日
- 節分 旧二月八日
- 大まなく 旧二月八日
- 才日待 旧二月九日
- 紀元節 旧二月十一日
- 三月 彼岸祭 旧三月三日
- 離 旧三月三日

Additional text on the right page includes a detailed account of a festival or ritual, mentioning various activities and participants.





<p>八月朔 八百十日 二百十日 十五日 秋分 彼岸 九月 二十日頃 二十三日頃 二十三日頃</p>	<p>九月 二十日頃 二十三日頃 二十三日頃</p>	<p>十月 中九日 羽黒神社祭 金田羅祭 地鎮祭</p>	<p>旧八月一日 旧八月中 旧八月十五日 旧九月十三日 旧九月十九日 旧十月七日 旧十月九日 旧十月十日</p>
--	--	--	--

男女集合スルモ更ニ凡紀ヲ乱スコトナシ

荒日ナレバイ事トイヒテ任事ヲ休ミ強飯ナドヲ
タキ供ヘ平穩ヲ祈ル。鹿ノ入ニテハ獅子舞ヲ奉
納ス。
夜燈明ヲヒケ平穩無事ヲ祈ル。任事ヲ休ム。
尾花其他芋大根栗赤飯等ヲ上ル。

春ニヨナジ
春ニヨナジ
芒野米類果物等及赤飯(園子ヲ依ル家モ少シアリ)等ヲ
供ヘ月見コナス。子供等ハ巻藁ヲ各戸毎ニ打テ
祝フ。賞ヲ。
下岡原山瀧ケ花等ニ於テハ餅ヲツキ親戚ニ贈ル。
下岡両手ニマリ参拜人多シ。
下大久保ニテハ盛大ナル祭ヲナス。屋敷ヲ出シ
餅ヲツキ庭ニ麻ガテラテ立テ其ノ上ニ餅ヲ
掛ル。中ニ入レ地ノ神様ニ供フ。

五月
端午ノ節
五月五日
サナブリ
旧五月申

六月
ムケツ朝日
旧六月一日
天王様
旧六月十四日

七月
釜アタ
旧七月一日
盆踊
旧七月七日
旧七月十三日

六月朔
旧六月一日
旧六月十四日

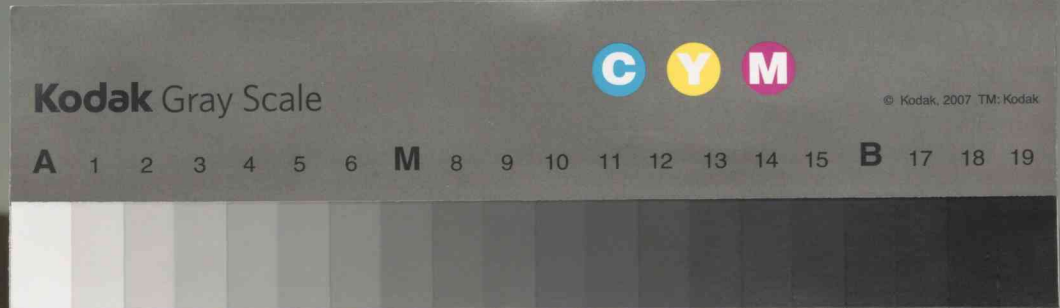
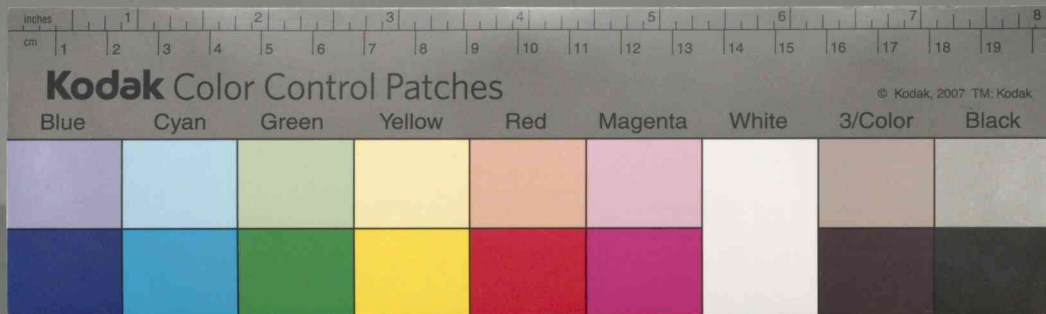
五月
端午ノ節
旧五月五日
サナブリ
旧五月申

四月
天長節
四月二十日
マンガ休
四月中

四月
藥師祭
旧四月八日
才三味
旧四月十七日

下大久保小曾根藥師(長昌寺内)八岡ハ殊ニ賑ヒ参
詣人多シ。
金剛山ノ祭日ナリ。当日ハ諸國行者参拜ニ來リ
奥ノ院ニ三味石マテ参拜ス。
紀元節ニヨナジ。
麻蔴終リテ一段落ツケハ休業シ骨休ミヲナス。
鯉職ヲ立テ拍餅ヲツクリ軒下ニヨモギ菖蒲ヲサ
シ菖蒲湯ヲワカス。
田植終リテ勞ヲ慰スレタメ任事ヲ休ミ市馳走ヲ
食ベル。
小豆粥ヲ食ベル。
上大久保下岡塩沢中ノ畑ニテハ御輿屋台ヲ出シ
離シテガラ各戸ヲ廻ル。神酒神料ヲ献ス。
餅ヲツクリ御供ニ供ヘル。
新妙ニ色紙短冊ヲ吊シテ立テル。強飯ヲ食フ。
村ノ中央(八町)ニ櫓ヲ作り村人集ヒ來テ踊リタノ
シム。青丘賣店ヲ出シ純益ヲ其ノ費用ニアテル。





消防美検	本月中	大正天皇祭 旧十二月二十五日	八幡様 旧十二月十五日	冬至 二十三日頃	煤瑞 旧十二月十五日	亭終 旧十二月八日	大イナク 旧十二月七日	新嘗祭 土月二十三日	村社祭典 全日	勝善講 土月十五日	神明祭 旧十月十五日	明治節 土月三日	川ピタリ 旧十月十五日	恵出講 旧十月二十日	山神講 旧十月二十五日
------	-----	-------------------	----------------	-------------	---------------	--------------	----------------	---------------	------------	--------------	---------------	-------------	----------------	---------------	----------------

十二月
夜警
夜警検査
十二月一日

正月ニヨナジ
小川前ノ手古越路等ニ於テ最モ盛ニナス。
山仕事ヲスル者ノ集リナリ。

國旗掲揚
鍋餅ヲ奉ニサシ水神様ニ捧ゲルト云々川ニ流シ
子供ノ水難除トナス。
下町中ノ畑古鹿ノ入下八町(各神明様アリ)デハ
毎年順次ニ宿ヲキメ番ノ家ニ集リ祭ヲ行フ。
費甲ハ持出ノ所ト神社贈金利子ヲ當テル所トイ
リ相当賑ヤカナ祭デ氏子ハ樂シミニシテ侍ツ。
荷馬車業者ノ集リテ、當番宿ニ於テ勝善講ヲ祭リ
一年中ノ實業ノ足々ラシキ員改選ヲル。

國旗掲揚
大芝神社、神舟神社、姫宮神社一七一ニ盛大ニ舉行
ス。小學児童ニ依テ下ゲテタヘ、釣子モ酒
宴ヲナシ離テドモナス。

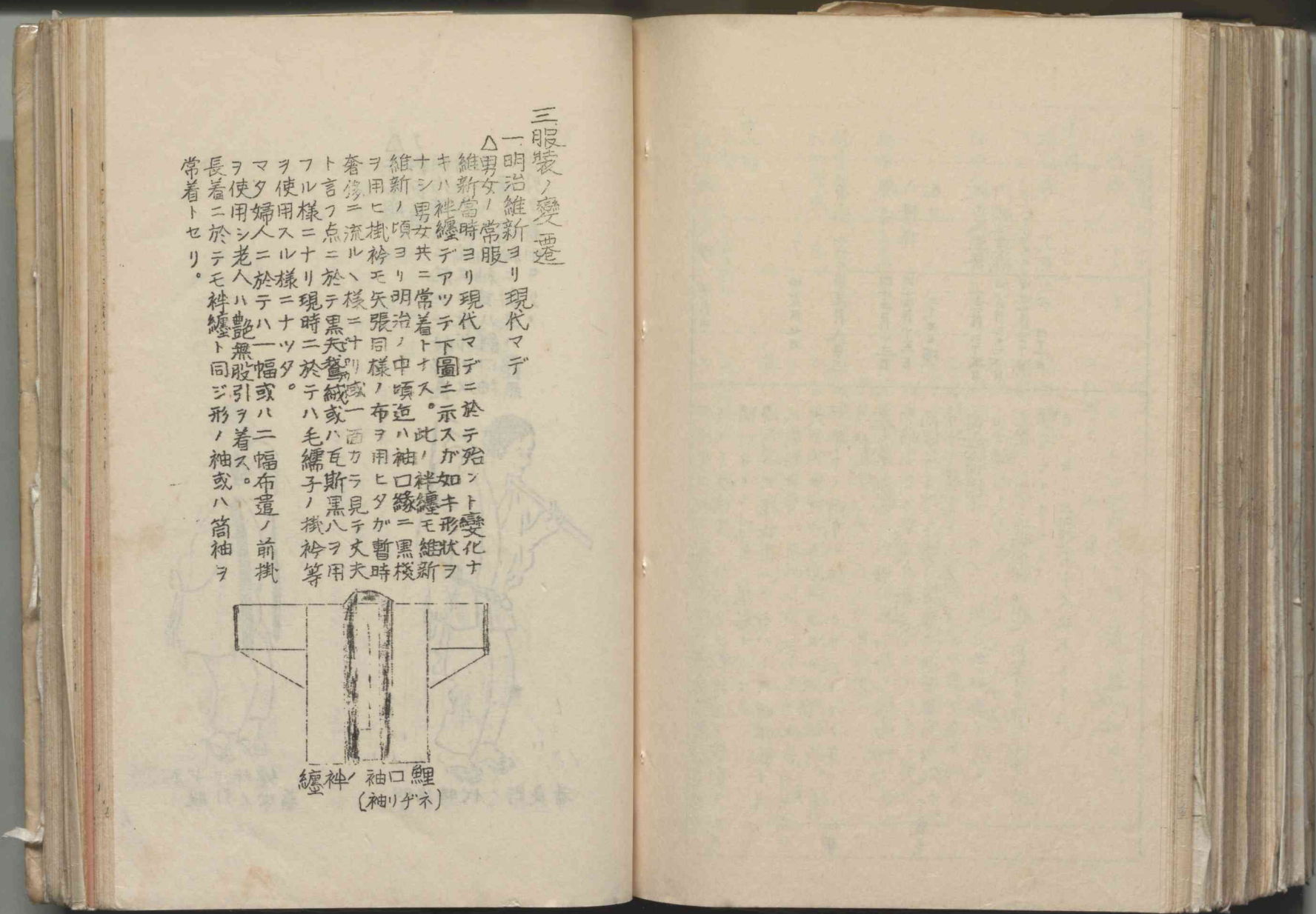
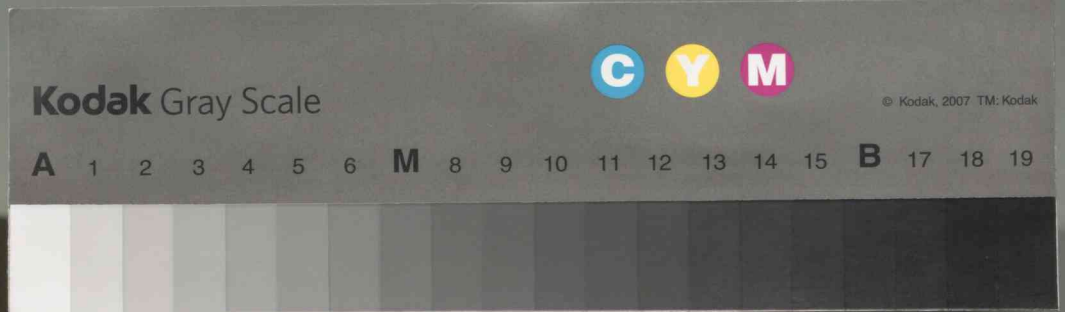
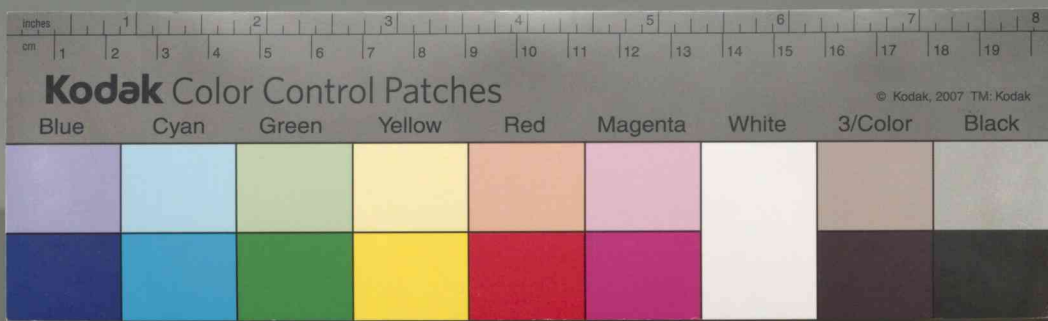
夜警ヲ始メル。
日ハ一定ヒズ、消防役員各戸ヲ廻リ検査ス。

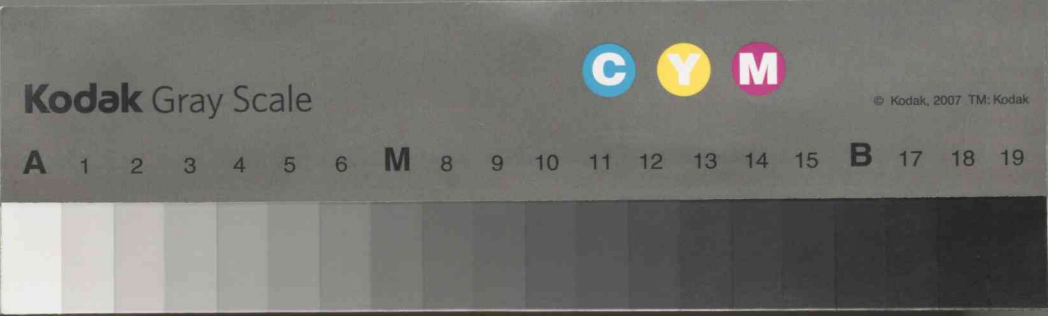
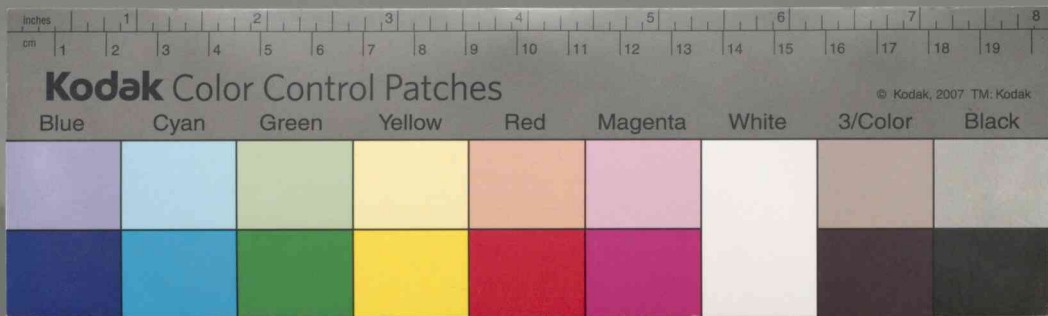
日一定ヒズ、警察ヨリ更検査出張員檢ス。
終リテ更検査ノ公評ニ勤績者ノ表彰ヲナス。
隣村ヨリモ役員ノ視察ナドアリ。
場所ハ大城校庭ニテ行ハレ三校順番ナリ。
厄病防止等ノ先ニカゴ又ハメカヒヲサシ、或ハ
大イナクゴラ入口ニフセル風習アリ。
一年中ノ御事ノ終トシテ人テイノ家デハ仕事
ヲ休ム。
各家ノ都合ニテ後日ニオフルモノアリ。
中田小川ノ八幡ノ御祭。
南瓜ヲトツテ置キ冬至トウナストイヒテ食シ、
アタリカキモノヲ食ヘル。

國旗掲揚
旧ニスルモノノ跡ニスルモノアリ。
遠回ノ若モ隣街ノ者モ古峯ヶ原ニ参リ
オコモリヲナス。
コノ日ハ参拝者千人以上トイフ。

以上







下圖ハ大正十二年頃ヨリ
 専ラ流行シタル襦袢様ノ
 仕事着
 始ハ木綿ニテ實用向デア
 ソタカ暫時華奢ニ流レテ
 銘仙或ハ縮ノ類ニテ仕立
 自轉車ニテ風ヲ切ツテヒ
 ナイルヲ見受クル様ニツタ
 ナイ位デアツタ



大正ヨリ現レ代



大正時代ノ野良着

△仕事服
 野良着
 明治時代ニ於テ一般野良
 着ニ木綿縮又ハ麻布ヲ以
 テ仕立タル袖或ハ鯉口袖
 ノ腰切襦袢ニ紺又ハ艶無
 股引ヲ着用セリ

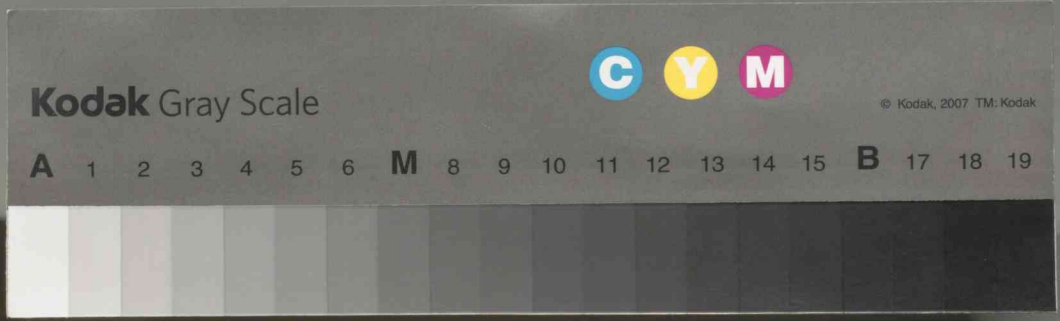
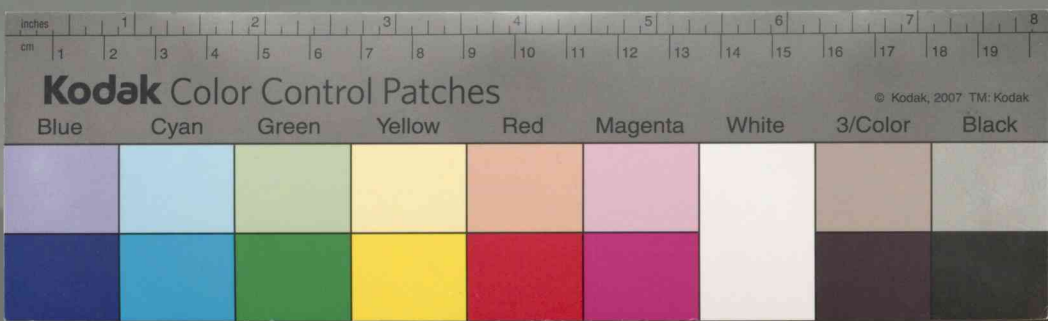


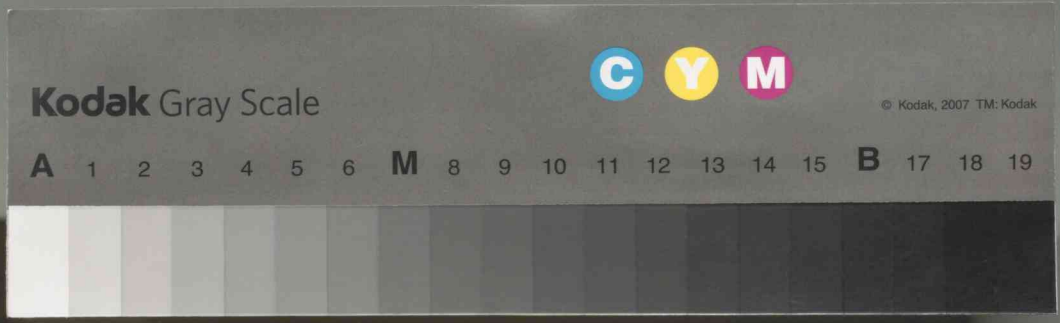
明治時代ノ野良着



木ノ股引ヲリテ常ノ纏



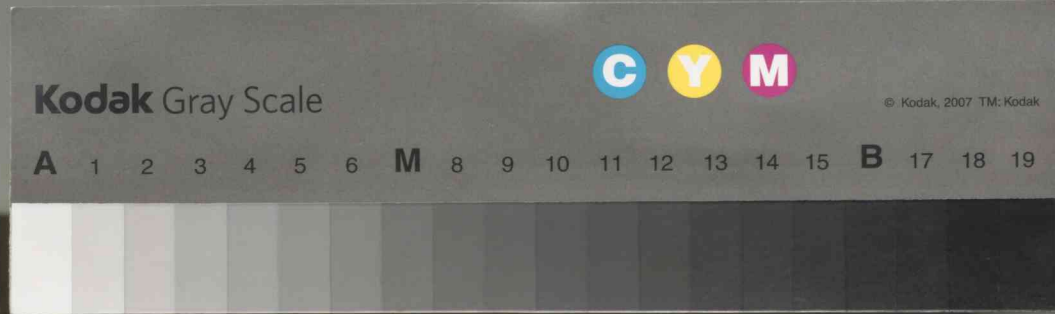




△染色
 明治初年ノ頃ハ半織物ニツイテハ殆ント自家染ヲ主トシタ。狩人ノ
 山着等ニ於テハ多ク、栗ノ木皮、キワダノ皮、柿澁ヲ染色材料トシ
 タ。暫時時代ノ進化した共ニ自家染ノ手數ヲ壓フカ爲ニ専門ノ染屋ニ
 依頼スル様ニナツタ。
 依等ヲ染屋ニ頼ム方法トシテハ、其ノ細キタル糸ノ幾分カニ天保銭
 ノ二三枚ヲ附ケテ是次加染メテ下サイト言フ様ニシテ希望ノ色ヲ添
 ヒテ染色シテ賣ツタノウデアル。

△織物
 明治初年ノ頃ハ常服、山着等農閑期ヲ利用シテ婦女子ノ午ニ依テ絲
 ヲ細キ布ヲ織ツタ物カ多イ。麻布ヲ(モノシ)ト稱シ夏季ノ衣服ト
 シタ。中ニモ、半襟袴、股引、下ノ帶、前掛等ニ用ヒタ。
 亦養蚕ヲナシ層繭ニ依テ太キ絲ヲ取リ布ヲ織ツタ。俗ニ大芦太織ト
 稱シテ極メテ不体裁ナル布デアツタ。是ヲ他所行ノ衣服ニ用ヒタ。
 時代ノ進化ニツレテ手織物ヲ着スルモノ暫時減少スルト共ニ機織モノ
 極メテ稀トナツタ。
 現今大芦太織モ体裁ニ一進歩ヲ來シテ一見羽二重ト思ハル、程ノ物
 トナツタ。
 猶七子織、綾織等、織ル様ニナツタ。





明治十二年頃カラ女物ノ長着ニ黒縞子ノ掛袴流行ス。現代ニテハ寢衣ノ外ハ用フルモノ稀トナツタ。男子ハ近來洋服ヲ着ルモノ見受ケル様ニナツタ。

羽織
 明治初年ニ於テ唐様、双子流行シ着丈ヨリ僅カニ(三四寸)約一五種米突位短キモノデアツタ。其後次第ニ短クナリテ裨纏マ、羽織ヲ着シタ下ヨリ腰ニ鉄ンダ手拭が見ユル程。モノヲ却テ伊達トケレタト言フコトデアアル。

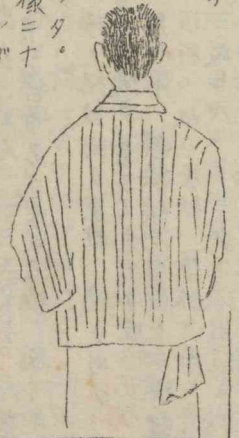
現代ニ於テハ再ヒ長クナリテ(三尺七八寸)約一。六糶米突カ普通トスル様ニナツタ。

併シテ一時綿入羽織流行シタカ現代デハ給羽織ヲ專用トス。

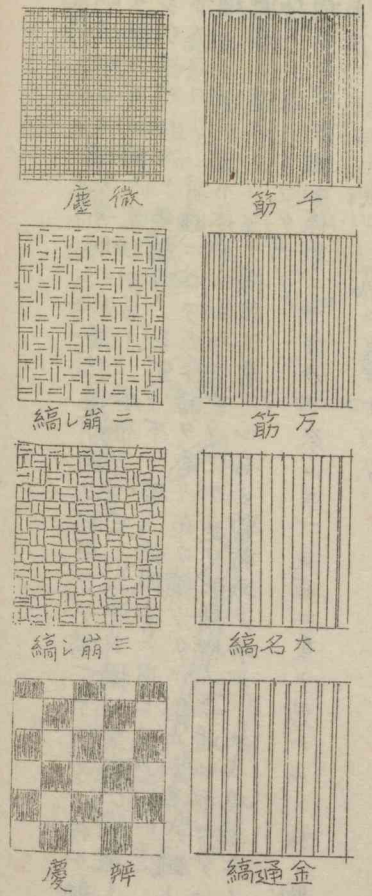
紋附羽織ハ老人ノ外ハ給ヲ專用トス。

紋ニ於テモ明治時代ハ大抵一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

現代ニ於テハ五所紋ヲ附スル様ニナツタ。紋ノ大小ノ変化ハ頻々ナルガ爲時代ヲ確定出来ス。



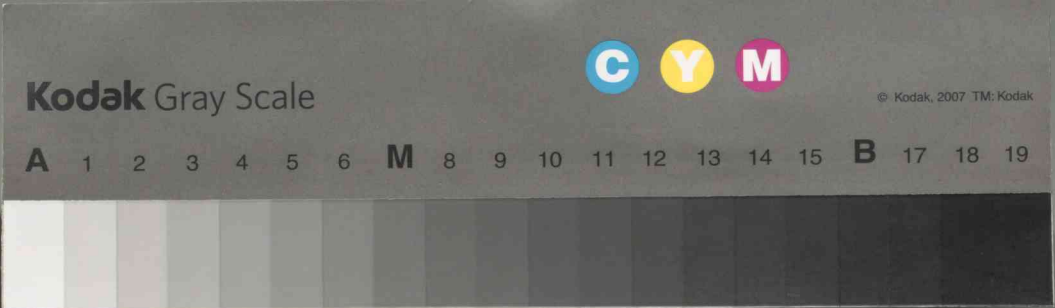
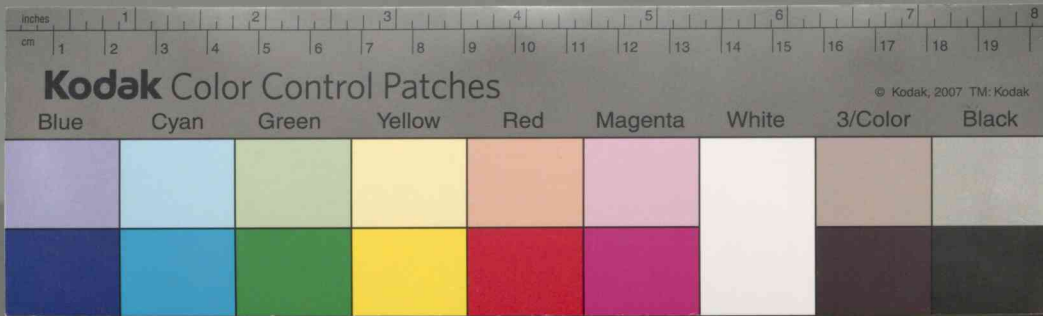
短羽織ニ
 手拭見工所



△一般男女ノ晴衣
 明治ノ初年ノ頃ハ外出着トシテハ男女共ニ大抵普通ハ袂袖ノ裨纏ヲアツテ地質ハ細、太織等デアツタ。

而シテ男物ノ裨纏及ビ長着ノ類ノ柄合ハ、万筋、千筋、大名縞、金通シ流行シ。色ハ、茶、藍、アツタ。女物ニハ茶微塵、藍微塵、茶及ビ藍ノ一クツシ、ニクツシ、三クツシ、辨慶等流行シタ。





地質、染色等ハ男物ノ冬物ニ黒ハ大、黒羽ニ重、黒子、大鳥餅、
 結城紬、高貴織、越後紬等ヲ専用シ普通黒ノ真岡木綿、紋附及綿織
 ノ紺緋ヲ専用トシテ居ル。
 夏物トシテハ一般ニ黒ノ縦又ハ横ノ絞紋附及黒紗ノ類ヲ用フ。往々
 縞縞ヲ用フル者モアリ。現時セル羽織ヲ着セ又者ナキ程ニナツタ。
 女子ハ黒及薄色ノ縮緬紋附或ハ黒七子、絞織類ヲ用ヒシカ現時ニ於
 テハ錦紗縮緬、紋羽ニ重等ヲ流行シ絞ハ漆紋、縞紋ヲ用ヒ染色ニ
 ワイテモ、紫、エンダ、青等、一般ニハツトシタル派当好ミトツ
 タ。按ズルニ暫時文明ニ進ムニツレ本村ニ於テモ近クハ鹿沼町或ハ
 遠ク都會ヨリハ輸入シヨツテ自然ノ変遷ニ依ルモノト思フ。
 明治初年ノ頃ハ女子ノ都合地質トシテ黄ハ大編ヲ専用シタ。現時ニ
 至リテハ銘仙、高貴織、メリンス、羽ニ重小紋添、セル等専用サレ
 兎角明治時代ハ女子夏羽織ヲ着スル者本村ニナカリシカ近來紹縮緬
 紋紗ノ類ヲ用ヒ合着用トシテセル羽織ヲ着用スルモノ増加セリ。
 羽織ノ胸紐
 明治年間、細、太、長、短、色、等ニ種々ノ変遷ヲ経テ現代ニテハ
 男子ハ白ノ尺長平紐ヲ、女子ハ細キ打紐ニテ中間ハ数本ニシテ本末
 ハ一本ノ物トド用ノレ共色ハ一定セズ、併シテ近來紐掛ニ金具ヲ用
 フルヤウニナツタ。

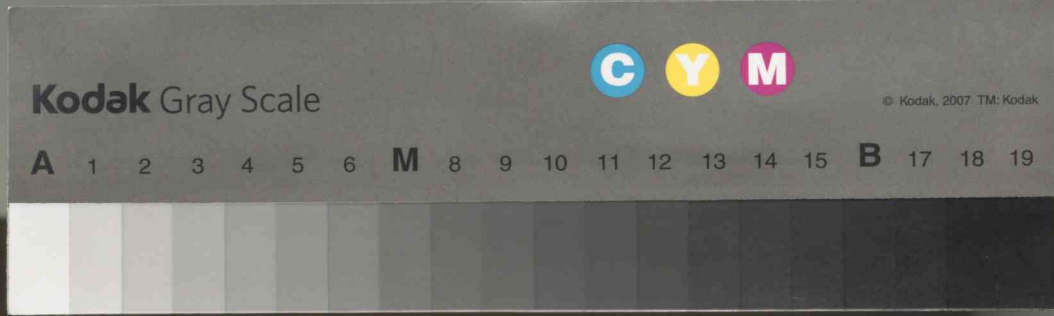
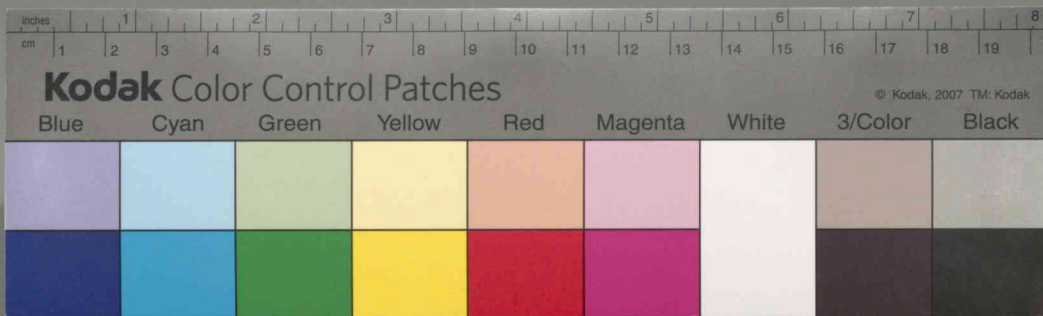
長着ニ於テモ地質は染色共ニ羽織ニ異ナラズ、近來メリンス、ネル
 セル等流行シ、メリンスハ夏冬共ニ用ヒラレ、中ニモセルノ衣服ヲ
 用フルコト著シカ流行シテ來タ。

裏地
 裏地ニ於テハ明治時代女物トシテ、胴裏ニ紺金巾、裾廻シニ、大人
 物モ子供物モ、木綿花色或ハ銀草ト称スル類ヲ用ヒ、晴着トシテハ
 秩父絹、甲斐絹、ナリメン等ヲ用ヒラレ、男物モ銀草、秩父絹ヲ
 用ヒラレタ様アルガ、現時ニ於テモ別々變リナシト認ム。
 現時ニ於テハ其ノ種類多ク、羽ニ重、絹細、甲斐絹、ナリメン、メ
 リンス等主ニ用ヒラレ、色モ各色好ミノモノヲ用フル様ニナツタ。
 明治ノ末頃ヨリ女子ノ白キ裏地ヲ用フル者次第ニ多クナツタ。

四甲衣
 近年單衣ハ一般ニ各種ノ綿織、交織、銘仙、高貴織、絹等ノ縞、緋
 流行シテ居ル、其ノ柄合、色共時ノ流行ニヨツテ定マラス。

袴
 明治三十四五年頃ヨリ裝束袴ノ様ニ染タ袖地流行シ、明治三十七
 八年頃ヨリ筒袖ノ袴ヲミナラズ筒袖ノ衣服ヲ用フル様ニナツタ。
 亦夏冬共ニ襦袢流行シ、夏ハ縮ノ半襦袢ヲ用フ。現時ニ於テハ毛絲
 製ノ、チヤキ、シヤケツ等、専ラ流行ス。





女子ハ長襦袢ニツイテ夏遷ナケレ共男子ノ長襦袢ハ日露戰役後(明治三十八九年)次第ニ奢侈ノ風行ハレ其ノ頃ヨリ夏冬共用フル者アリテ其ノ地質、冬物ニハ縮緬、羽二重、夏物ニハ絹、紹縮緬等ヲ用フル様ニナツタ。

イ角帯
明治四十四五年頃ヨリ再び角帯ヲ用ル者ナリテ地質、博多、綿博多等用ヒラレシガ現時稀トナツタ。

口三尺帯
現時男帯ノ事ヲ三尺ト言フハ元一重廻リノ帯ニシテ長サ三尺ナル故ニ名トス。昔ハ三尺手拭ヲ用ヒシトカ、又六尺ノ二重廻リノモノアリドモ紵ズシテ、シゴキ帯ヲ今ハ長短ヲモ論ゼズ三尺帯ト称スルナリ。

八、兵兜帯
明治戊辰以來白縮緬ノハ尺帯ヲ用ヒ青年其他一般ニハ白ノ木綿或ハ白、綿縮ノ類ヲ兵兜帯ト名附ケテ車ヲ之ヲ用ヒラレ明治ノ中頃ニ至リ紫、黄、黒、白等、色物メリンス兵兜帯流行シ明治四十年頃ヨリ小紋又ハ種々ノ紋ヲ用フル様ニナツタ。地質ハ錦紗縮緬、蘇紬、毛斯、綿織等種々アリ

二、廣幅帯
女子ノ幅廣帯モ暫時幅狭ナルモノヲ用フルニ至ツタ。丸帯ハ明治時代、幅一尺(三七、八寸)米突(丈一尺)約四。〇(一)腹合帯ニ幅八寸短クナツタ。又一大モカワク、現時ニ於テハ丸帯腹合帯共ニ幅八寸短クナツタ。明治ノ中頃、鯨帯ト称スル帯流行シタ。現時ハ半幅帯及夏物、單衣帶等用フル様ニナツタ。

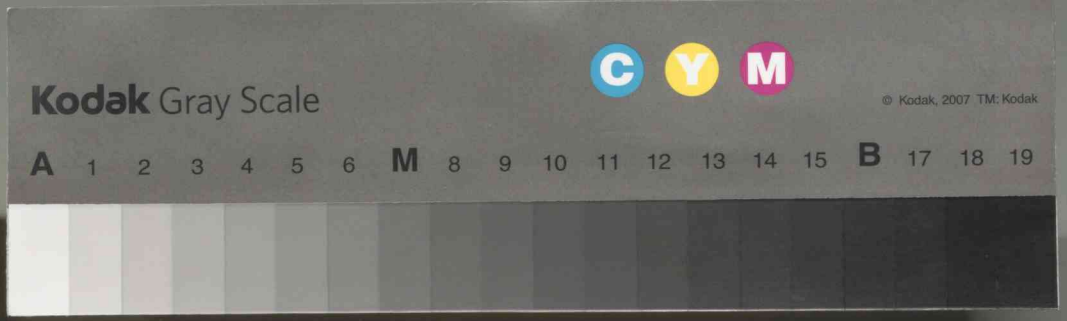
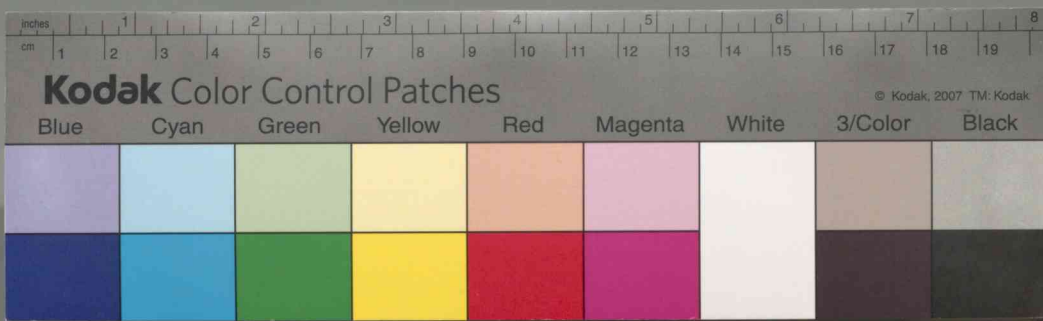
袴
木綿小倉、仙台平某、他ノ袴高袴デアツタカ近來セルノ袴無袴ヲ用フル様ニナツタ。

手拭
昔袴ニ手拭トテ大名ノ供ノモノ揃ヒノ麻織ノ手拭ヲ用ルノ如ク疊ミテ腰ニ挿ミタリ、其ノ歩行ノ際ニ加動キテ、自カラ開閉スル様ナルヲ伊達ト云フ事デアツタ。要スルニ始メハ裝飾品デアツテ、挿ミ手拭ハ筒袖ニ起因スルラシク、後ニハ實用物トナツタノデアアル。現時ニ於テハ洋式ノハンカチト略シテ、ハンカチト言フモノヲ用ヒヌタオトルヲモ愛用スルニ至ツタ。

浴衣(ユカト訓ス)
近來都會化シテ浴衣ヲ着ル様ニナリ手拭地等が多い。

湯巻(禪)
明治時代ヨリ婦人ハ縮緬、真岡木綿、晒木綿、毛斯、天竺木綿等ヲ





現時巻脚半(ゲートル)専ラ盛ニシテ青年等多ク用フ、色ハ紺、茶、
 アリ、幅二寸位(七、五種)ノ長キ紐テアル。

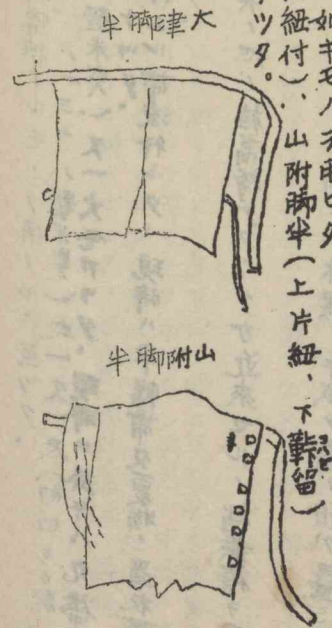
足袋
 明治時代ハ草鞋掛ト言ツテ、山仕事野良仕事用トシテハ平麻ヲ以
 テ底ヲ刺シ甲ハ紺或ハ淡黄木綿ヲ刺シタ物デアリ。現今ニテハゴム足袋ト称シテ
 底ハゴム、甲ハ藁織ニナツテ居ル。
 通帯足袋トシテハ、夏冬共ニ用フルモ、多クナツタ。其ノ色種々ア
 リ、男子ハ白又ハ紺木綿或ハ、縞子、天竺絨等、女子ニ於テモ同様
 差異ナケレドモ冬ハ各色好ミノ天竺絨足袋ヲ用フ。又夏足袋ニ單ヲ
 用ヒレコトハ明治四十年頃カラノ流行デアリ。又其ノ頃男子ハ紺飛
 白定袋ヲ履クコト流行シタカ今ハ全ク廢ラレタ。
 近時莫大ニ製、上履用ニ、白、茶、紫、等各色他種ノ交織ヲ作ツタ
 カバトナリ、流行シテ居ル。猫毛糸編ノ足袋、靴下等草鞋
 ナルモノナツタ。

△衣服ノ形状
 婦人ノ袖次及ビ袖附ト帯トハ相関聯シテ、袖次短ケレバ袖附多ク隨
 ツテ帯幅狭シ、袖次長ケレバ袖附少ク隨ツテ帯幅モ次第ニ廣クナツ
 タ。其内明治九年ノ廢刀令カラ一般袖次次第ニ長クナツテ男子ハ
 裁切一尺四五寸(五三、五五種)位ヲ普通トナツタ。爲ニ袖附ニ、

用ヒ、近來毛糸製ノミヤコ腰巻ヲ使用スル様ニナツタ。
 男物ニハ維新当地其マノト思ハル、現時メリヤスノ洋褌ヲ使用スル
 モノ多クナツタ。

服引
 昔ハ白地ニ藍ノ敷小紋ヲ専用シタソウデアリ、維新後ニ於テハ勞働
 用トシテ、眞木綿ノ紺或ハ淡黄木綿ノ單衣服引ヲ専用トス。
 現時洋服ヲ用ユルト共ニ毛織物ノ長ツボン下、半ツボン及ツボン下
 ヲ用ヒ、冬季ハ和服ノ下ニモ、莫大ニ、毛糸服引ヲ後用ス。
 夏季ハ縮、半薄ノメリヤス、リッセル等ツボン下ヲ着用ス。

脚半
 維新當時専ラ次ノ如キモノヲ用ヒタ。
 大津脚半(上下共紐付)、山附脚半(上片紐、下片留)

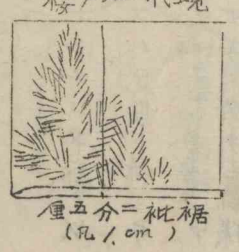
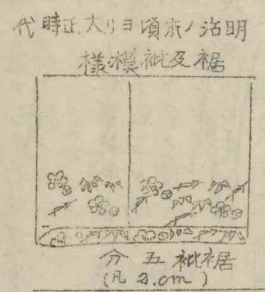
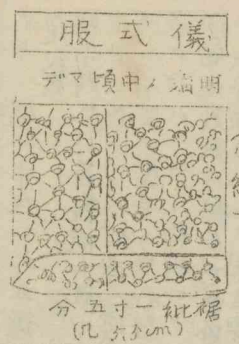
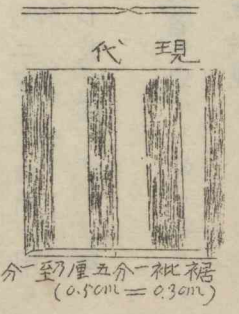




△ 禮 服 装
 花 綉 新 服 装
 明 治 維 新 頃 八 詳 ナ ラ ス 。 本 村 ニ ツ イ テ 一 般 ニ 見 ル ニ 大 体 略 装 ヲ 專
 ラ ト シ テ 居 ル 。
 羽 織 ハ 黒 七 子 或 ハ 果 羽 二 重
 三 ツ 紋 又 ハ 五 ツ 紋
 長 着 ハ 縞 ヲ 用 ヒ テ 居
 ル 。 紐 ハ 白 平 打
 帶 ハ 兵 児 帶 ヲ 代 用
 白 足 袋 貯 下 駄 ヲ
 用 ヒ テ 居 ル 。 袴 仙 臺 平
 紐 ノ 結 方 ハ 古 來 ヨ リ 石 畳



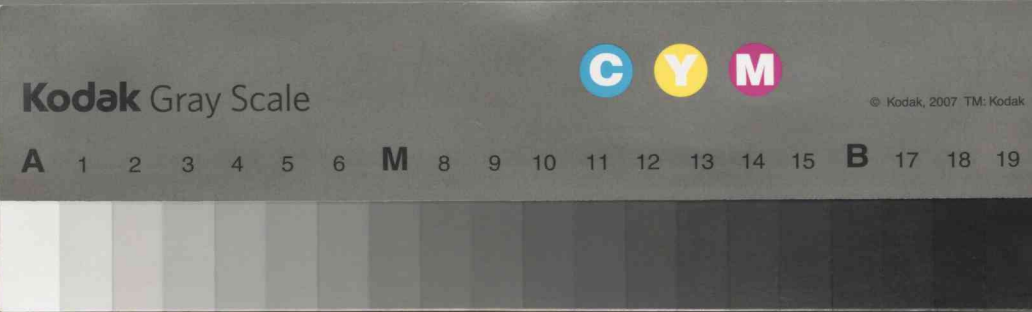
装 服 花 綉



裾 衽 及 柄 模 樣 ノ 變 遷 ノ 圖

三 寸 (一 種) 位 ノ 人 形 ノ 必 要 ナ 起 ヲ ヲ
 妙 齡 ノ 女 子 一 尺 七 寸 (七 〇 糎) 普 通
 二 妙 齡 及 ビ 賜 明 ノ 必 要 ナ 生 シ 〇 糎
 然 身 大 短 ク 三 尺 六 寸 (一 〇 〇 糎) 此
 ツ 身 現 代 於 今 男 子 十 寸 比 較 上 〇 糎
 八 短 ク 女 子 現 今 男 子 十 寸 比 較 上 〇 糎
 第 一 減 子 現 今 男 子 十 寸 比 較 上 〇 糎
 位 女 子 十 寸 比 較 上 〇 糎
 樣 女 子 十 寸 比 較 上 〇 糎





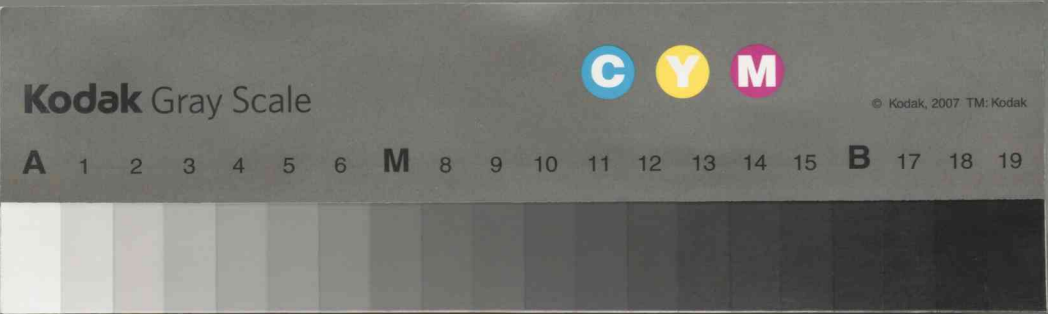
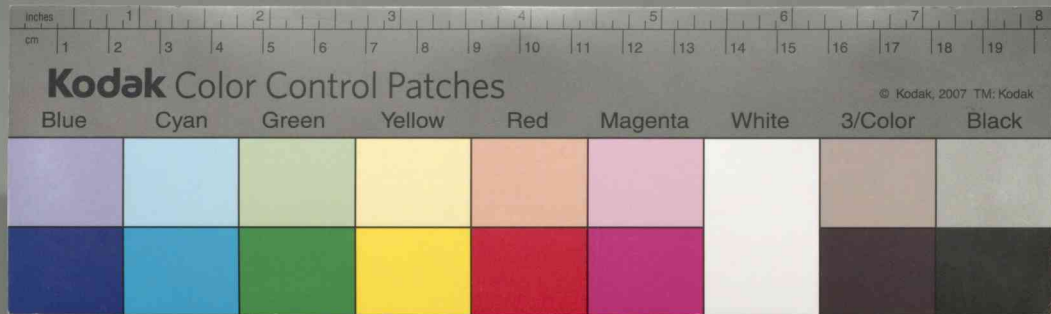
明治時代

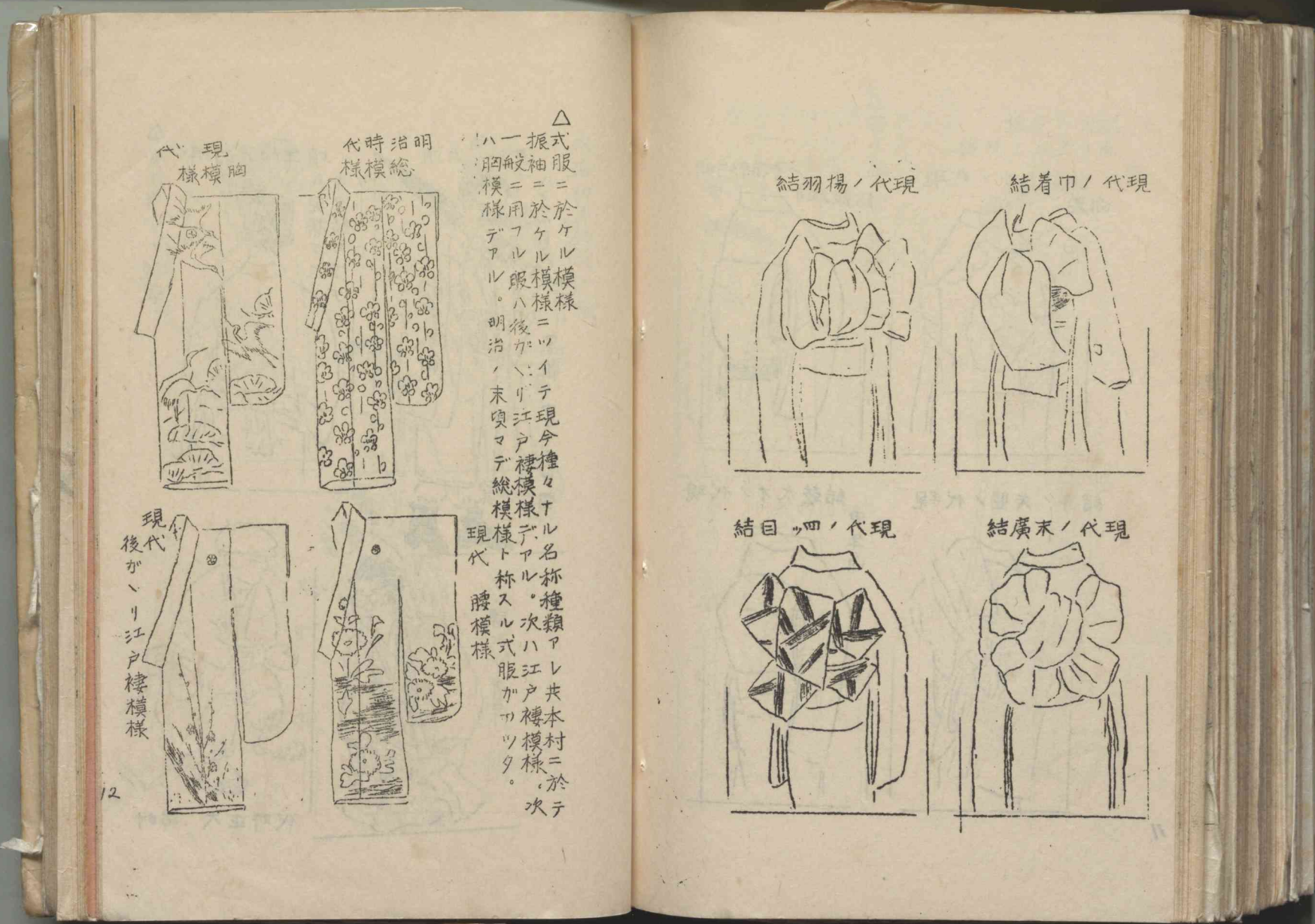
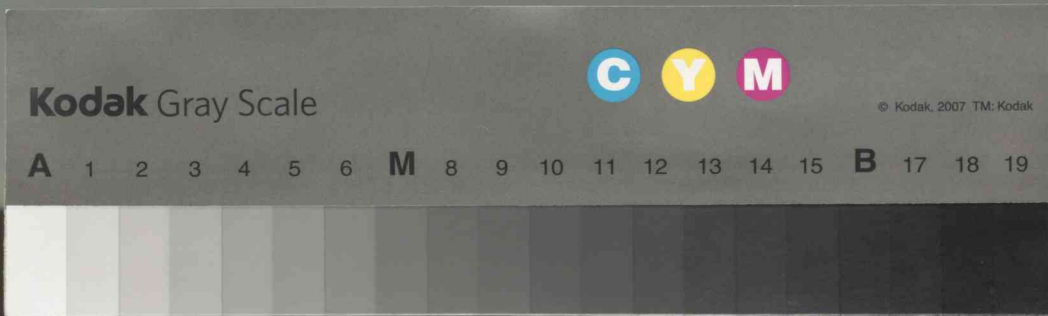


帯ハ唐織、唐綿等ノ丸帯
 棉袴ハ紅紋羽二重或ハ緋紋縮緬振袖或ハ留袖長襦袢
 白羽二重刺繍入半襟
 附屬品
 伊達巻、紋縮緬シゴキ、鹿ノ子帯揚、緋紋ナリメン腰帶、丸紵帯締
 或ハ金具附帯締、花笄、揚帽子(角カクシ)、笠迫、房附扇子、白羽
 二重足袋、紅白二段重草履、或ハ表附駒下駄
 夏季ハ上着ノ紹ケリメン、下着ノ白紹ケリメン、紗等ヲ用ヒ帯ハ紹
 若クハ紋紹丸帯ヲ用フ。
 ○花嫁二様

帽子モ略式ノ中折ヲ用ヒテ居ル。
 花嫁ノ服装
 明治ノ初年頃ノ花嫁ノ服装ニツイテモ詳ニ述ベ難シ、然レ共村ノ老
 人等ニヨリ極メテ一部分ヲ知ルノミ、尚種々ナル段階アリテ一様ナ
 ラズ、先ツ一般普通農家ノ子女ノ婚禮衣裳トシテ用ヒラレシモノハ
 黒地羽二重或ハ小紋染、三ツ紋附ヲ上着トシ、間着緑小紋。下着白
 羽二重ノ一枚重木或ハ三枚重ネヲ着用シタ。裏地、羽部ハ三枚福廻
 ハ無垢カ多イ。其後暫時変遷ヲ來シ、上着モ色物ヲ用ヒ裾モ裏リ裾
 ヲ用ヒル様ニナツタ。
 上着ハ曙染、松、竹、梅、鶴、龜、其他白出度模様花ニ刺繍入ノ腰
 模様、裾模様等
 裏地ハ三枚通シヲ用ヒタ。
 下着白羽二重或ハ白綸子ノ無垢比翼、裏ハ白羽二重或ハ白絹ヲ用ヒ
 タ。又取ハズシノ出來ル附比翼ヲモ流行シタ。
 現時ニ於ケル服装トシテハ一概ニ確定出來ザレ共一般ニ依レバ左ノ
 如シ。
 上着、黒古濃縮緬振袖或ハ留袖(色物好ミ)
 時代ノ動キニツレ種々變化アリ、又自カラ風習モ異ナリ好ミモアリ
 テ色ハ一定セズ。
 下着、白羽二重、或ハ赤白古濃縮緬中下着附三枚重木







代現
様模胸

代時治明
様模総

△
振式
胸般袖服
模ニニニ
様用於於
テアルケル
アル服模
ハ様模
。後ニ
明治カ、
末江リテ
頃マ江現
テマ戸今
テマ戸種
総模々
模様ナ
模様ナル
現代トアル
称スル。次
腰模ハ式
様ハ江レ
式ハ共
加戸本
カッ模
夕様ニ
。於
次テ

現
後代
か、
江
戸
様
模
様

12

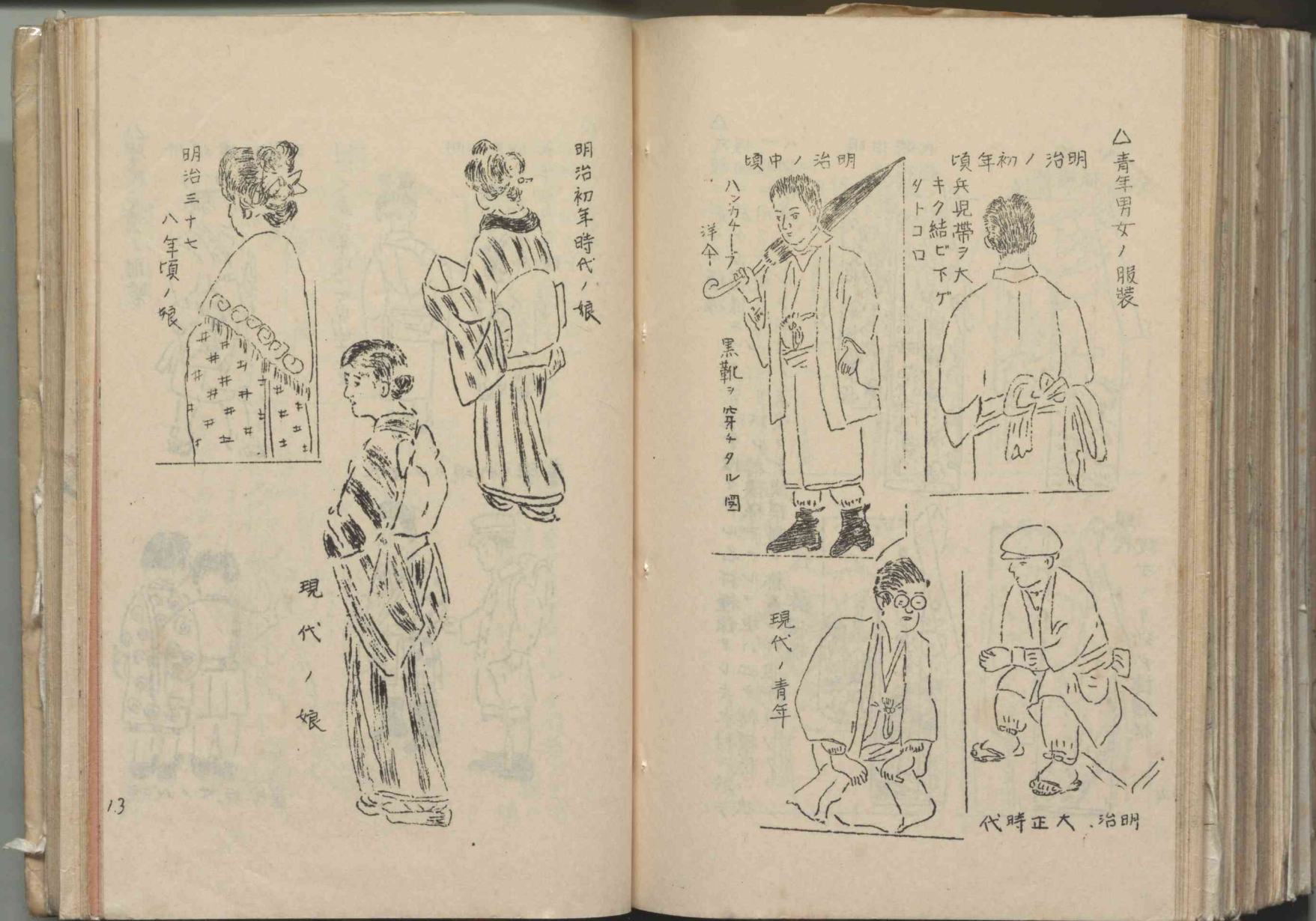
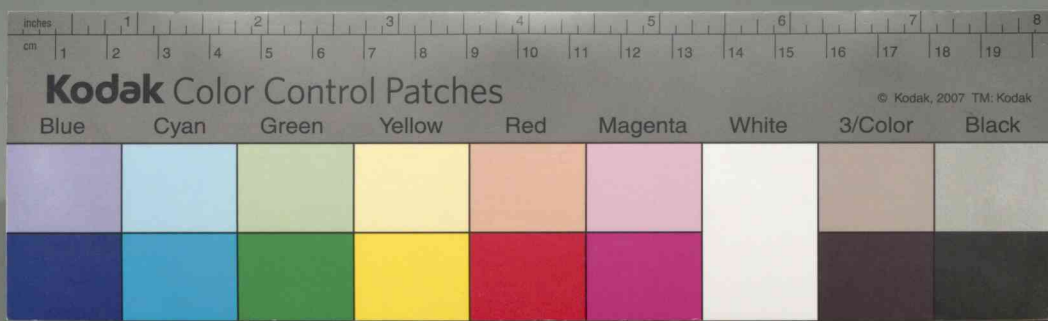
結羽揚 / 代現

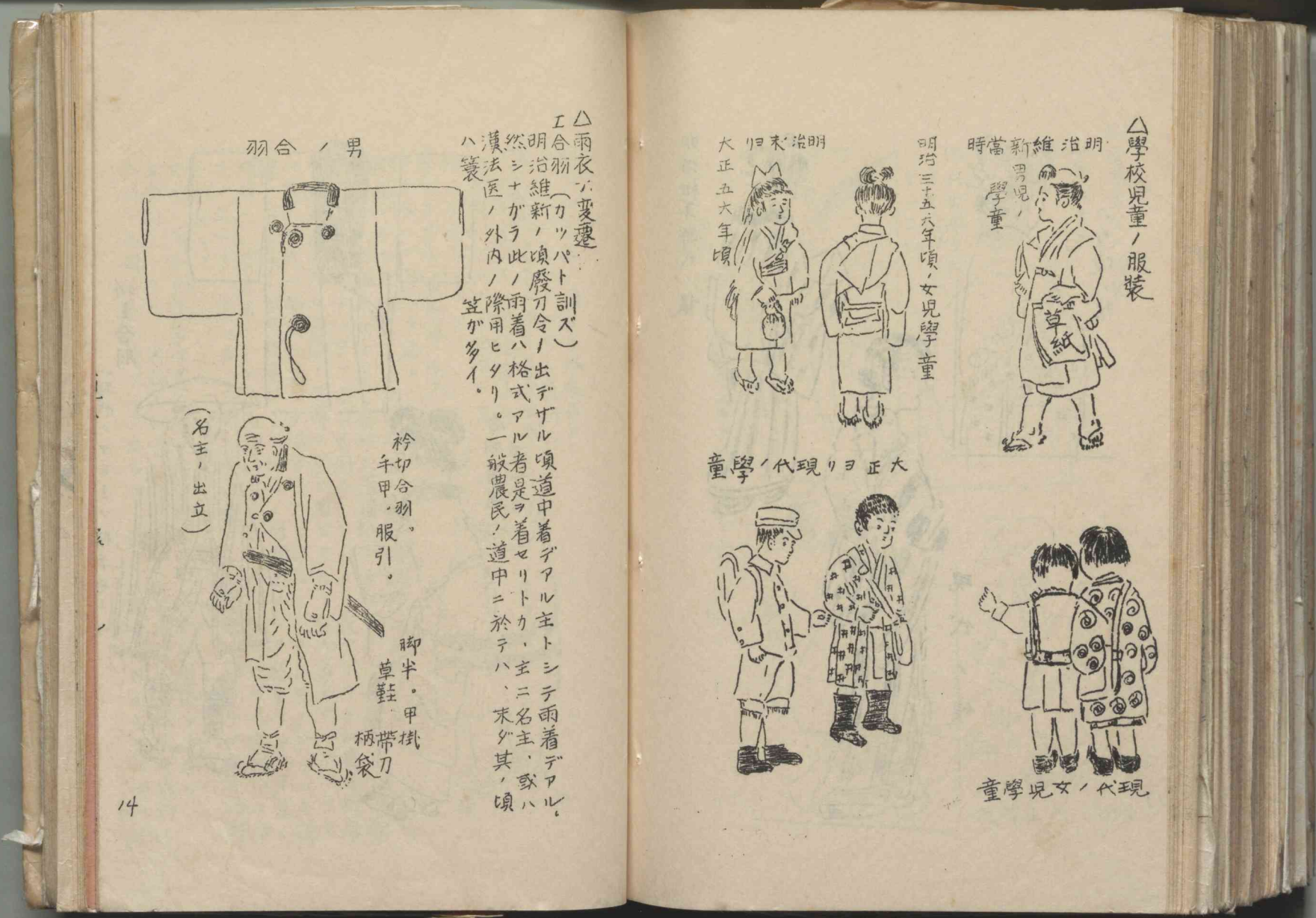
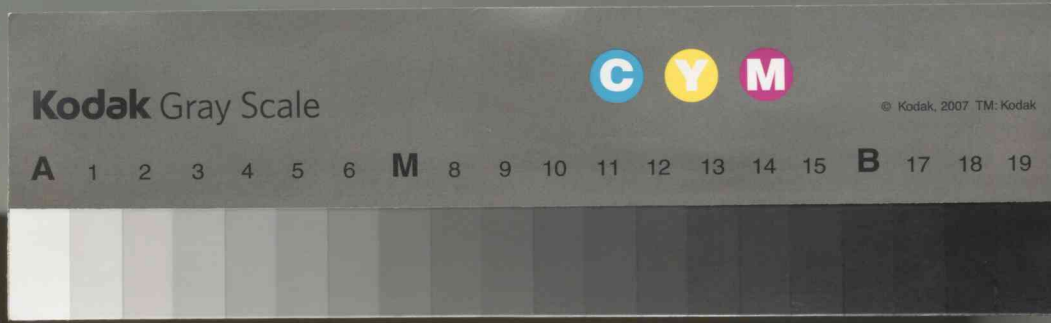
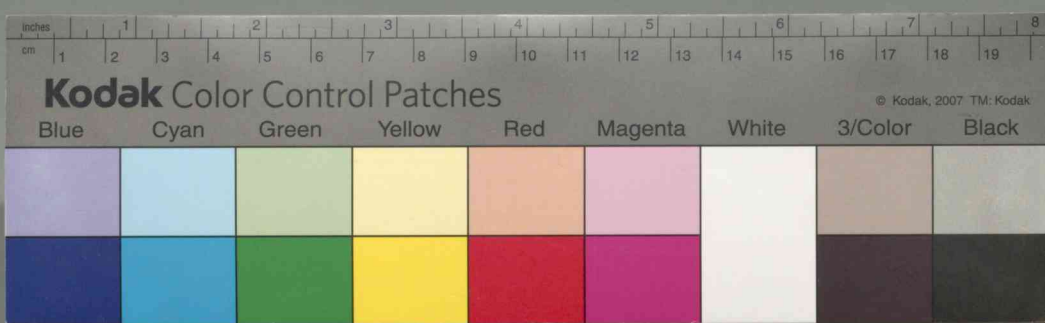
結着巾 / 代現

結目 / 代現

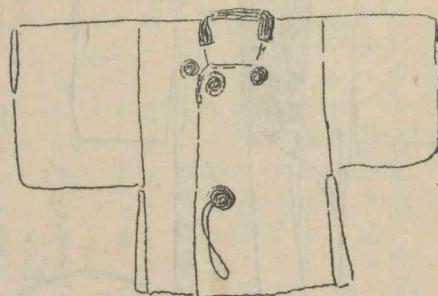
結廣末 / 代現







羽合 / 男



(名主、出立)

衿切合羽、
甲引。

脚半、甲掛
草鞋、柄袋

14

△雨衣の變遷
工合羽(カッパト訓ズ)
明治維新ノ頃廢刀令ノ出デサル頃道中着デアル主トシテ雨着デアル
然シテ此ノ際用ヒタリ。一被農民ノ道中ニ於テハ、末々其ノ頃
漢法匠ノ外内ノ際用ヒタリ。一被農民ノ道中ニ於テハ、末々其ノ頃
ハ箆

明治末頃
大正五六年頃



大正現リヨ童學



明治三十五年頃、女兒學童

明治維新
當時學童



△學校兒童ノ服裝



現リヨ女兒學童

